

第一次世界大戦期の徳富蘇峰とアメリカ

——一九一四——一九一八年——

澤 田 次 郎

はじめに

一 アメリカへの不安——「日米衝突と人種戦争」

二 アメリカへの抵抗——「亜細亜モンロー主義」

三 アメリカへの敬愛——「米国魂と自恃の精神」
おわりに

はじめに

徳富蘇峰（一八六三——一九五七）は近代日本の代表的なジャーナリスト、歴史家として知られている。

大正三年（一九一四）七月二十八日、オーストリアがセルビアに宣戦布告したことから第一次世界大戦が勃発した。八月に入るとロシア、フランス、イギリスがドイツと相次いで戦闘状態に入り、八月二十三日には日本もドイツに宣戦する。九月、日本は赤道以北のドイツ領太平洋諸島を占領し、十一月には青島を陥落させたほか、

同盟国イギリスの要請に依りて地中海に艦隊を派遣した。大正六年（一九一七）、アメリカの参戦とロシア革命の発生により大戦は新たな局面に入り、翌七年八月から日本とアメリカがシベリアに共同出兵を開始するが、それから間もない十一月に大戦は終了する。

この四年にわたる第一次大戦期、徳富蘇峰は五十一歳から五十五歳にあたり、ジャーナリスト、言論人としての地位は確固たるものがあつた。明治三十四年（一九〇一）の第一次桂太郎内閣の誕生以来、桂に協力し、實際政治にかかわつてきた彼は、第一次護憲運動、大正政変を経て大正二年（一九一三）十月に桂が亡くなった後、政界から身を引き、「立言者の本分」に立ち返つて文筆中心の人生に復帰することにした。⁽¹⁾かねてより自己の晩年は修史に充てたいと考えていた蘇峰は、大正二年暮れから三年の初めにかけてその準備に着手する。しかしながら三年五月、父・一敬（淇水）の逝去に大きな衝撃を受けた彼は、しばらくの間「生ける屍」同様となつて、気落ちした日々を送つていた。そうした蘇峰を目覚めさせたのが第一次大戦の勃発である。世界大戦に向けて心を一転した彼は、全力を傾けて『世界の変局』（大正四年）を発表し、続けて『阿京去留誌』『蘇峰文選』（同四年）、『大正政局史論』『大正の青年と帝国の前途』（同五年）、『公爵桂太郎伝』（編著、乾坤二冊）、『杜甫と弥耳敦』（同六年）、『支那漫遊記』（同七年）などの後に彼の代表作となる著作を次々と世に出した上、大正七年より畢生の事業となる「近世日本国民史」の連載を『国民新聞』紙上で開始し、同年中にその第一巻『織田氏時代 前篇』を上梓した。⁽²⁾

こうした自著を蘇峰は様々な名士に贈っているが、彼に近しい山県有朋のような人物がこれに賛辞を呈しただけでなく、例えば『大正政局史論』を受け取った政友会総裁・原敬は「右貴論ハ国民新聞紙上ニ於て日々面白く拝見致し論鋒及御觀察の鋭利周到なるニ深く敬服罷在候」とし、同書は「現代及将来ニ亘りて時務ニ志あるもの、好参考書たるは申すまでも無之……」との礼状をしたためている。⁽⁴⁾また当時、政治家としての道を歩み出そ

うとしていた若き日の近衛文麿は、はじめて蘇峰と顔を合わせた翌日、次のような手紙を書き送っている。「小生は已に十数年来国民新聞を購読致し居り先生に負ふ所は実に少からざるものに候」、近頃先生が論壇に復活したことを国家のために深く喜ぶものであり、とくに近世日本国民史を通じて国民の教化を図るのは誠に結構なことで、「当今先生を措いて此大任に当るべき人は他に断じて無之と確信仕候」と期待を寄せている。⁽⁵⁾

右の例にうかがえるように、蘇峰の文章は政治家からも着目され、その影響力は看過できないものがあつた。そうした彼は大戰勃発の当初から日本政府を支持し、大正三年八月十五日、政府がドイツに東アジアからの艦艇退去と、膠州湾権益の日本への交付を求める期限付通牒を発すると、これはきわめて公明正大であると賛同し、⁽⁶⁾八月二十三日、日本がドイツに宣戦すると、「独逸は極東平和の禍乱者たり」、「須らく全国同心、聖旨を対揚し、我が帝国の発展、興隆を期す可き也」と主張した。⁽⁸⁾十一月に入り青島陥落の報を聞いた蘇峰は、自分が日本国民であることを光榮とすると喜ぶとともに、戦局の前途はなお遼遠であるとして国民の気の緩みを戒め、列強交闘、強食弱肉の世界にあつてわが帝国の国運をいかに伸長していくかを考えるべきだと訴えた。⁽⁹⁾

このように影響力ある言論人としてドイツとの戦いを擁護し、日本の国益拡大と発展を希求する蘇峰はその一方で、イギリスを超える世界の大国として台頭しつつあつたアメリカをどのように眺めていたのだろうか。大戦期日米外交の主な焦点となるのは、いわゆる対華二十一カ条要求、石井・ランシング協定、シベリア出兵であるが、管見の及ぶ限りではそれら（特に後者二点）に対して蘇峰は十分なコメントを残していない。彼の関心はむしろ移民問題、アメリカの工業成長と海軍拡張、およびこれは二十一カ条要求問題と関連するが、辛亥革命後の米中接近に向けられていた。大正二年、カリフォルニア州で第一次排日土地法が成立すると、蘇峰は日米親善に挫折し、アメリカに背を向けるようになったが、⁽¹⁰⁾その直後の時期にあたる第一次大戦期、彼の対米認識はいかなるものに変化したか。また変化しなかつた部分はあるのだろうか。

さらに大戦期の蘇峰は大正六年九月から十二月にかけて、誕生間もない中華民国を旅行している。⁽¹¹⁾ 後述するように、当時の彼は辛亥革命によって成立した中華民国と、同国を「姉妹共和政体」として歓迎するアメリカの接近に不安を抱き、かつ両国の排日（アメリカの日本移民排斥運動、中華民国の日貨排斥運動）を懸念していた。形態は異なるにせよ反日で共通する米中の接近を見て、蘇峰はそれまで以上に日米中の三国関係を意識し、その将来を考えるようになる。

本稿では第一次大戦期における蘇峰のアメリカ観を、その中華民国観と合わせ見ながら考察してみたい。もともこの時期の蘇峰について言及した論考は少ない上、彼とアメリカに焦点を当てた論文は、管見の及ぶ限りではほとんど見当たらない。⁽¹²⁾ 本論はそうした先行研究の空白を埋めるものである。

一 アメリカへの不安——「日米衝突と人種戦争」

第一次大戦期の蘇峰はアメリカに関して次の三点を危惧していた。第一に同国の日本移民排斥運動、第二に急速な経済発展、第三に米海軍の拡張である。

まずアメリカの日本移民排斥運動と蘇峰について見ておきたい。よく知られるように大戦期、アメリカの日本移民排斥運動は下火となり、一種の休眠状態に入った。しかしながら、日露戦争後の経緯を観察してきた蘇峰は、同運動が前進と後退をくり返しつつも、結局はさらなる進展を見せることを見抜いており、大戦当初から事態を樂觀することはなかった。むしろ「排日は、下層より上層に及べり、西部より東部に蔓れり。今や米国の全体と云はざるも、其の大半は排日の空気を以て、充溢せられつ、あり」、しかしこの排日運動は容易に根治できないとの深刻感を深めていた。⁽¹⁴⁾

とくに蘇峰が危惧したのは、第一次排日土地法に次ぐ新たな排日法案を立法化する動きが出てくるのではないかと(15)いうことであつた。こうした予想は的中し、大正六年(一九一七)、アメリカ連邦政府は大戦への参加と前後して、それまでの移民関係法規を総合した新しい移民法の草案を明らかにする。同法案の第三条には第一次排日土地法と同様に帰化不能外国人(日本人を含み、中近東を除く全アジア人を指す)の表現が登場し、これは欧米人の人種差別に憤る当時の日本人に屈辱感をもたらすものであつた。そのため本国政府の訓令を受けた珍田捨巳駐米大使はウィリアム・J・ブライアン(William Jennings Bryan) 国務長官、ウッドロー・ウィルソン(Thomas Woodrow Wilson) 大統領に嚴重な抗議を行った結果、日本はアジアの例外として移民法の入国禁止規定の適用を免れ、「アメリカに帰化できない外国人」という文字を削除することにも成功した(16)。

右のようにアメリカではカリフォルニア州にとどまらず、連邦政府もアジア系移民に警戒の動きを見せるようになっていたが、民間世論においても排日の動きが止まることはなく、黄禍論は増え続けた。その主唱者はハースト系の新聞雑誌と米国内におけるドイツの「プロバガンダ・マシン」であつた(17)。その一人が米退役陸軍大佐、アラバマ州選出下院議員、ハースト系メディアの寵児として知られたリッチモンド・P・ホブソン(Richmond Pearson Hobson)である。ホブソンはかねてから日本海軍の脅威、日米戦争の可能性を訴えて人心を煽り、米海軍の拡大と防衛強化を主張してきたが、それは大戦期も変わらなかつた(18)。そうした様を見て蘇峰は、ホブソンが「例の如く頻りに無根の事実を流布して、排日論を鼓吹しつゝ、あり」と顔をしかめ、「元来日米の葛藤は、一日も本より持ち懸けたるものなし。日本は只だ米国の傍若無人の仕打に對して、已むを得ず正当防禦を做さんとするのみ。若し米国にして穩妥ならば、事はそれ迄也」と嘆いた(19)。日本はアメリカと戦う気がないのに、アメリカは一方的に日本へ敵意と問題を仕向けてくるというのが彼の実感であつた。

ホブソンの言動に限らず、蘇峰はアメリカの排日について様々な方面から情報を集めている。その一人にシド

ニー・L・ギューリック (Sidney Lewis Guick) がいた。ギューリックは会衆派 (組合派) のアメリカ人宣教師で、移民問題をめぐりアメリカ側の人種偏見と日本への誤解を解くため多数の著書、論稿を執筆し、講演活動を行うなど日米の相互理解に精力的に尽力したことで知られる。²⁰⁾ ギューリックは明治四十年 (一九〇七) から大正六年 (一九一七) まで同志社大学の神学教授を務めており、大戦中は日本の対独戦争を支持し、アメリカ側の排日アジテーションは日本に屈辱を与え、アメリカに不名誉をもたらすものだと言張し、大戦中から大戦後にかけてハースト系メディアや排日家の論客モンタヴィル・フラワーズ (Montaville Flowers)、ヴァレンティン・S・マクラッチャー (Valentine Stuart McClatchy)、ジェームズ・D・フィラーン (James Duval Phelan) 上院議員、ジョン・E・レイカー (John Edward Raker) 下院議員などと論戦した。²¹⁾

同志社大学の校友で日米両国のキリスト教関係者に人脈をもつ蘇峰は、このギューリックの著書『米日問題』(The American Japanese Problem) を入手していた。お茶の水図書館成實堂文庫に蘇峰旧蔵の『米日問題』が保存されており、そこに記された書き込みを追うと、蘇峰がこの書を通じて日本側の正当性をますます確信したであろうことがうかがえる。²²⁾ 同書においてギューリックはアメリカの排日の問題点を衝き、日本移民を擁護する議論を展開しているが、その主旨はあくまでアメリカと日本の融和にあった。欧米に流れる黄禍論の風説はギューリックにとって頭痛の種であったが、彼はそのような禍を転じて福としなければならないと考え、次のように記した (傍線は蘇峰の書き込んだアンダーラインを再現したもの、以下同様)。

黄禍は私たちにとって黄金の好機になるかもしれない。東洋における白禍がその土地に予期せぬ恩恵をもたらしているように。西洋は東洋が、東洋は西洋が必要なのだ。この重大な時期にあたって白人がアジア人を正しく待遇するならば、「このまま行くと」確実に予想される人種の衝突を防ぐことになるであろう。それゆえ、私たちには新しい東洋政策が必要なのだ。²³⁾

西洋人は日本の興隆を見て黄禍論を唱え、日本人は西洋のアジア支配を見て白禍論を唱える。このままでは双方の間に人種衝突が起こるであろうが、西洋と東洋はお互いに必要な存在であって、アメリカ人はアジア人を正しく待遇し、黄白両人種の衝突を回避すべきだというのである。さらにギュエリックは、日本移民が独身のまま訪米し、貧しい食生活にも耐えて働き、白人よりも安価な労働力となっている点が批判されていることを指摘したが、こうした記述によって蘇峰はアメリカの内情をより深く知ることができた。またギュエリックは、カリフォルニア州法務長官で排日のリーダーであったユリシーズ・S・ウェップ (Ulysses Sigel Webb) のコメントが反日アジェンションと排日法案の真の目的を示しているとして、これも紹介している。それによると、ウェップ州法務長官は州議会、連邦議会を問わず移民問題をめぐる法案の論拠となっているのは、その人種が劣等か優等かではなく、「好ましくない人種であるかどうか」という点であるとした。⁽²⁵⁾つまり日本人はアメリカへの移民として「好ましくない」というのである。カリフォルニア州の法務長官という権威ある公職者の言葉を通じて、蘇峰は日本移民がアメリカでいかに厭われているかを知らされたのである。

次にギュエリックはアメリカ側の誤解を解くため、次のように説明する。

一九〇九年から一九一二年の間、わが移民当局の統計によれば、出国者の方が入国者よりも六、六六四名多かった。排日カリフォルニア人はそれでも決して満足しない。⁽²⁶⁾

日本人雇用者は日本人労働者しか雇わないというのは、厳密には真実ではない。例えばカリフォルニアの「ポテト王」島氏〔英語名・George Shima, 日本名・牛島謹爾〕は特定の種類の仕事に白人を雇っている。⁽²⁷⁾

このようにギュエリックは証拠をあげながら日本移民の脅威が誇大に喧伝されていることを明らかにする。蘇峰はこうした説明によってアメリカの排日活動家の言説、論拠、問題点を知ることができたが、さらに大戦終了

直後、ギューリックが出版した『新排日アジテーション』(The New Anti-Japanese Agitation)を熟読することにより、反日家の主張の誤りを様々な角度から認識することができた。⁽²⁸⁾このように蘇峰はギューリックによつて移民問題をめぐるアメリカの内情、排日の構造について知識を深めたが、他方アメリカでは、日本への理解を求めるギューリックは排日運動家から反発を受けただけでなく、同国の捜査・情報機関からも疑惑の目を向けられた。とくに大戦後、司法省捜査局(のち連邦捜査局 FBI: Federal Bureau of Investigation)はギューリックへの監視を強化し、大正八年から十二年の間、エージェントがしばしば週ごとに彼に関して報告を行い、ギューリックが日本に旅行中の大正十一年から十二年においてすらレポートがなされた。そうした監視を命じた J・エドガー・フーヴァー(John Edgar Hoover)は、日本がアメリカの安全にとつて脅威であると考えており、ギューリックは日本から報酬を得てプロバガンダ工作を行っていると信じていたのである。⁽²⁹⁾

蘇峰はアメリカ側の非を指摘するギューリックを日本の良き理解者と考えたであろう。しかしギューリックの見解がアメリカ言論界の主流でないことは十分承知していただろうし、蘇峰のアメリカに対する心理的な距離は大戦中も離れる一方であった。移民問題をめぐって蘇峰が論点とするのは従来と変わらず、日本人を他のヨーロッパ白人と差別して待遇するのは、日本人ひいては日本国そのものを侮辱するものだといふ点にあり、⁽³⁰⁾大戦期を通じて彼の屈辱感が収まることはなかった。また後述するように蘇峰は大正六年十一月、中華民国を旅行した際、上海を訪れているが、ここでも欧米人の人種偏見を感じ取っている。上海公園や競馬場に中国人が入れないことを知った彼は、門戸開放、機会均等主義の白人にしては面白いやり方だとの皮肉を述べている。⁽³¹⁾

大戦期の蘇峰が危惧した二点目は、アメリカの急速な経済成長である。すでに大戦前夜より世界の工業総生産の三分の一を産出し、「世界の工場」であったイギリスに追いつき、追い越したアメリカは、よく知られるように大戦を境として債務国から債権国へと転じた。戦中から戦後にかけて、アメリカの工業製品(軍需物質、機械、

自動車、鉄鋼製品など）のヨーロッパ向け輸出は大幅に拡大し、大正六年の参戦時の生産力はドイツ経済の二・五倍となっていた。加えてヨーロッパの連合国政府に対する大規模な貸付け、証券投資の急上昇によって資本輸出は三〇億ドル増（証券投資一八億ドル、直接投資一二億ドル）となり、さらに戦後の大正八年から昭和四年までの約十年間に証券投資はほぼ三倍、直接投資は二倍まで増加した。そのうちアジアでの直接投資（原料・資源投資）は、絶対額ではラテンアメリカの八分の一にすぎなかったものの、戦前に比して三・七倍に増えている。³²

そうした中で蘇峰はロシアに代わる雄国としてアメリカの存在に大きな脅威を感じており、その不安は戦争が進むにつれて一層強くなった。当初から彼は、大戦後の世界に台頭するのは中立国として利益を得るアメリカであろうと予想していたが、その後も以下のように記している。世界戦争によって列強がみな疲弊する中で、軍需品の問屋となった米国には、世界の金貨が雨のごとく降り注いでいる。かの国は一躍して「世界の財権の中心点」、列強が機嫌をうかがう「一大覇権国」となったが、今日ですらそうなのだから、戦後、同国の鼻息はすこぶる荒くなるだろうというのである。³⁴

アメリカは単に上昇過程にある経済大国とされただけではなかった。蘇峰から見る同国は、満洲における日本權益を排除し、自ら満洲、中国大陸に経済進出しようともくろむ自己中心的で強引なライバル国に映じた。それによると、世界戦争により一大成金となった米国が従来のモンロー主義で満足できるかは疑問である、彼らの目と手はシナに向かつており、今後フィランダー・C・ノックス（Phlander Chase Knox）国務長官の満洲諸鉄道中立化提案（明治四十三年、一九一〇）と同じようなことが続出しないと誰が保証し得ようと彼はいう。³⁵

さらに大正四年（一九一五）一月、日本が提出したいわゆる対華二十一カ条要求についてアメリカが不同意の態度を示すと、蘇峰は日本の權益を妨害するアメリカのイメージを一層強めた。ブライアン国務長官は日本の要求の一部に異議を唱える一回目の通牒を発したが（三月）、これは対日譲歩的性格が顕著なものであった。さらに

この問題に関心を高めた米政府が最終的に対日強硬方針に転じ、不承認主義を表明する二回目のブライアン・ノートを送ると(五月)、蘇峰は不満を募らせる。もし逆に日本がアメリカとメキシコ、アメリカとブラジルの交渉に容喙すれば、アメリカは必ず日本を非難するはずだといふのである。⁽³⁶⁾

ノックス前國務長官の提案、ブライアン國務長官の通牒を通じて蘇峰が感じたのは、要するに次のようなことであつた。日本は東アジアにおいて列国の權益を認めた上で行動している。アメリカが中南米に対して行つてゐるようなことを、より温和かつ謙抑的に行つてゐるにすぎない。それなのになぜアメリカは日本の權益に挑戦的干渉的な要求を行い、キリスト教の金言「己が欲する所を人に施せ」を実行しないのかといふわけである。⁽³⁷⁾

こうした蘇峰の考えはアメリカ政府、國務省の見解と相容れないだけでなく、同国の民間輿論の大勢とも全く対照的なものであつた。「二十一カ条要求」の内容を漏れ伝え聞いたアメリカの新聞雑誌、言論人の多くは、これを中国の門戸開放、機会均等、領土保全を損なう野心的なものとみなして日本に嫌惡と不信の目を向けた。同要求を含む日本の外交方針は「日本モンロー主義」[The Japanese Monroe Doctrine]として知られるようになるが、それに理解や同情を示したのは、先のギュリックや後述する週刊誌『アウトLOOK』(The Outlook)など一部にとどまつた。⁽³⁸⁾二十一カ条要求とブライアン・ノートを経て、蘇峰とアメリカ側の見解の相違、隔たりは拡大し、それは後のヘンリー・L・スティムソン(Henry Lewis Stimson)國務長官によるスティムソン・ドクトリンの表明(昭和七年、一九三二)とこれに対する蘇峰の反発の原型をなすものであつた。

以上のように蘇峰は、「傍若無人」な「大覇權国」アメリカが日本の權益を考慮せず、満洲、中国大陆にその經濟力を拡大しようとしているとのイメージを抱いた。以後、蘇峰はアメリカの存在を「米禍」と捉えるようになる。⁽³⁹⁾ハワイ、フィリピンを獲得したアメリカはさらに迫り来て、鷲が両翼を開いたように日本と東アジアを包圍しつづつあるといふのである。⁽⁴⁰⁾

蘇峰が危惧した第三点は、アメリカの軍事力拡大であった。とくに彼の危機感を高めたのは、大正五年（一九一六）のいわゆるダニエルズ建艦計画である。その前年の大正四年七月、ドイツ潜水艦が英船ルシタニア号を撃沈し、多数のアメリカ人乗客が犠牲となった後、ウィルソン大統領はアメリカの戦略的自由を確保するため海軍拡張に乗り出し、世界無比の海軍「Navy Second to None」を建設するためのアドバースを海軍将官会議に求めた。やがて戦争が終わろうともドイツ、イギリス、日本、あるいはそれらの連合がアメリカに挑戦する可能性があり、強力な海軍を作る理由が存在すると考えられたのである。海軍将官会議は沿岸から遠距離の地点で敵を撃破するのが最善であるとし、五年間でドレッドノート型戦艦一〇隻、アメリカがそれまで保有しなかった巡洋戦艦六隻、さらに偵察巡洋艦一〇隻、駆逐艦五〇隻、潜水艦六七隻の建艦を提案し、ウィルソンはジョシーフ・ス・ダニエルズ（Josephus Daniels）海軍長官にこれを組み込んだプランを立案させ、議会に提出した。議案は広い支持を集め、ユトランド沖海戦の英独艦隊決戦に巨艦の重要性を刺激されたことも手伝い、議会の承認を経て大正五年（一九一六）八月、「一九一六年海軍法」（The Naval Act of 1916）が成立した。これによって大正八年（一九一九）七月までに総計一五六隻の建艦計画が開始され、十一年（一九二二）または十二年（一九二三）までに完成の予定となった。世界第一の海軍をめざすこの計画によって、アメリカ海軍は新たな時代を迎えたのである。⁴¹

大正五年八月におけるこの米海軍拡張のスタートを聞いた蘇峰は、深刻な危機感を抱いた。これは日本をターゲットとし、日米戦争を想定したものだといふのである。ルシタニア号事件によって近い将来、中立国アメリカがドイツに宣戦するのではないかということは当時容易に想像できた（実際のアメリカ参戦は大正六年四月）。蘇峰も米海軍拡大の狙いの一つはドイツにあることを十分承知していたが、その真の標的はドイツだけではないとした。彼によると、先年来よりアメリカの造艦方針は、航海力の増大に傾いている。とくに明年度（大正六年度）

においては、三十五ノットの巡洋戦艦五隻とそれに加えて大型の駆逐艦、潜水艦、石炭・弾薬・食料の運搬船、病院船などの建造を計画しているのであって、対手を遠洋の外に求めていることは明らかである。「彼等は実に太平洋を横断して、大艦隊を送る可き、準備最中と知る可し。」⁴²⁾ああ太平洋か、不太平洋か、「今日に於ては疑もなく、米国の仮想敵は、日本帝国なる可し」というのである。⁴²⁾

このように蘇峰は、アメリカ海軍が対日渡洋作戦を行い、西太平洋で日本海軍と戦うための準備をしていると考えた。それは大筋において事実に近いといえる。第一次大戦勃発前の大正二年、アメリカの太平洋戦略を立案する海軍将官会議と海軍大学は、同国の建艦計画はドイツ、日本という潜在的挑戦者を念頭に置いて作られるべきであるという点で一致し、翌大正三年、海軍将官会議が策定した対日作戦計画オレンジ・プラン (Orange Plan) は太平洋侵攻のための三種類のルートを予定し、その第一ルートは、ハワイ・オアフ島↓ミッドウェー島↓ウエーク島↓フィリピン・ルソン島マニラ湾というもので、第二、第三ルートはそれより南のマレーシア諸島を通りフィリピン・ミンダナオ島からマニラ湾に北上するものであった。よく知られているようにオレンジ・プランが米軍部内ではじめて登場したのは明治三十七年 (一九〇四) であり、その後、検討が重ねられた結果、戦闘は大別して第一局面 (日本のグアム、フィリピン占領)、第二局面 (ハワイから西太平洋を横断してのグアム、フィリピン奪還作戦)、第三局面 (フィリピンから日本への侵攻) の三点を予想していた。その中でも第二局面のハワイからの渡洋作戦がもっとも面倒なもので、プランナーたちがその標準的シナリオを大体において創り上げたのは、約十年の研究を経た後の大正三年のことであった。⁴³⁾こうした経緯をふまえた上で、アメリカ政府は先に見た大正五年のダニエルズ建艦計画を打ち出すことになるのであり、蘇峰はアメリカ側の意図を大枠において読み取っていたことができる。ただし米海軍大学は大正二年夏の時点で、アメリカが大西洋でドイツと戦っている間に日本の太平洋攻撃があり得ると予想していたが、⁴⁴⁾蘇峰は後述するように日本がアメリカへ積極的に戦い

を挑むことはあり得ないと考えていた。

蘇峰から見て挑戦的、攻撃的であるのは、あくまでも相手国アメリカであった。しかしながら西太平洋にグアム、フィリピンを領有するアメリカが、それらと地理的に近い日本との戦争を考慮、研究するのは当然のことであり、それだけでは危険な行為とはいえない。この点は蘇峰もよく承知しており、アメリカが日本を仮想敵にするからといって、直ちに日米が敵国同士になるわけではないとする。また、かつてペリーが行ったようにアメリカが突然、大艦隊を差し向け、日本に強談すると思えないと述べている。⁽⁴⁵⁾しかし彼は次のように議論を進めていく。日本が「逆に」アメリカに押し寄せるなどというのは「アメリカ排日活動家の」捏造、讒誣に他ならないが、日本側にそうした企謀がないからといって、アメリカにそれがないと保障できるだろうか。同国は平和国を称するが、その歴史は戦闘をもつて終始しているではないかという。⁽⁴⁶⁾

……彼等「アメリカ」にして其心あらば、日本をして堪忍袋の緒を断たしむるの方便は、幾許もある也。日本に向て喧嘩を押売する口実は、幾許もある也。吾人は今現に其心ありとは云はざる也。されど若し米国にして、一挙に日本の勢力を、太平洋より駆逐するの見込み立つあらば、彼等は果して尚ほ指を啣へて、雄大なる艦隊を擁して、見物す可き乎、否乎。⁽⁴⁷⁾

さらに蘇峰は以下のように続ける。アメリカでは街頭の輿論が時の都合でいかようにも変化し、政治家がこれに迎合することが少なくない点を考えれば、自分は不安が増すのを禁じ得ない。アメリカが積極的に喧嘩を売りつけようとしても、こちらが回避すればそれまでだという者もいるが、それにも限度がある。「今夫れ武装せざる米国さへも、既に彼が如し「横暴である」とせば、武装充実したる暁に於ては、果して如何」⁽⁴⁸⁾このように蘇峰は、アメリカが対日作戦を念頭に太平洋の海軍力を強化し、将来日本海軍の劣勢を見てとれば、日本を挑発し、大艦隊によって日本の勢力を追い落とそうとするのではないかと考えた。西太平洋における日米開戦、すなわち

アメリカから先に戦いを仕向け、日本の「堪忍袋の緒を断たしむる」状況があり得ると彼は予想したのである。管見の及ぶ限りでは、それ以前の蘇峰が公の場でここまで明確に日米戦争のイメージと可能性を語ったことはない。ダニエルズ建艦計画はそれほどまでの衝撃を彼に与えたのである。したがって同計画とそれが発表された大正五年八月という年月は、蘇峰の対米観の変遷をたどる上で、一つの重要な指標になるといえよう。⁽⁴⁹⁾

なおそれ以前の蘇峰について一言しておく、そもそも日露戦争前、明治三十年代の日米友好期においても、彼はアメリカの興隆に懸念を示し、以後そうした不安は年とともに募っていった。日露戦争後の明治四十年代には日米未来戦争論の先駆的代表作として知られるホーマー・リー (Homer Lea) の『無智の勇氣』(The Valor of Ignorance) などを通じて日米戦争不可避論に傾き始めた様子がうかがえ、そこにダニエルズ建艦計画の衝撃が加わったわけである。⁽⁵⁰⁾

このように日米戦争のイメージを念頭に置くようになった蘇峰は、その上でどのような言動を示したのであるか。それは次の二点にわけられる。第一に、彼は日米戦争の到来を自然の趨勢であると考えていた。しかし第二に、戦争を肯定ないし諦観したわけではなく、それを避けるための方策を提唱している。つまり戦争を十分に予期し、そこに必然性すら感じつつも、その防止策を模索するというのがその基本的態度であった。第一の点から見てみると、蘇峰にとって日米関係の悪化は多分に不可避的なものであった。彼の観察によれば、アメリカが日本を厭うようになったのは、日本の興隆が、「米人の癩」に障ったからである。アメリカは日本をいつまでも「愛らしき小僧国」⁽⁵¹⁾としておきたかったが、日本が東アジアで競争者になろうとするのを見て、急に態度を一変したのだという。ただしこのように述べたからといって、蘇峰はアメリカを必ずしも手厳しく非難したというわけではなかった。彼によると、日米交情が冷めてしまったのは、日本側からいえばカリフォルニアの排日問題があり、米国側からいえば日本の韓国併合、南満洲における専横があるだろう。つまり理屈は双方にあり、交情冷

却の責任を一方に求めるわけにはいかない。それどころか責任はどちらに対しても帰すことができないのだという。米国が自国内だけにとどまらず、太平洋を越えて発展しようとするまさにそのとき、日本が強国として台頭し、その進出の障害物となった。「米力西漸も自然也、日本帝国興隆も自然也、既に自然とせば、之が為めに双方の交情を冷却せしめたるも亦た自然也。」したがって「日米の衝突は、米国の責にあらず、日本の責にあらず、両国の国運発展上、自然の結果のみ」というのである。⁽⁵²⁾さらにこのまま状況が進み、米国の武装充実、日本の準備不足という事態に至れば、日本は極東問題解決の主人公となる使命を自ら放棄するか、それとも「米国より一撃を加へらるゝ」かのどちらかを選ばざるを得ない。日米「膨脹の餘勢」が停止することはないから、そういう時が来ることを今より覚悟しなければならぬと蘇峰はいう。⁽⁵³⁾日本とアメリカはともに対外膨脹してとどまることなく、両者の膨脹線は必然的にぶつかり合う。そのとき日本は極東のリーダーの使命を放棄してアメリカに屈服するか、さもなければアメリカが日本に「一撃」を加えるかのいずれかになるというのである。また彼は同じことを別の表現で次のようにも語っている。すなわち世界は「強食弱肉」「人種の競争」の状況にあり、このまま自然の大勢に任せるならば「白人種黄人種の衝突」、具体的には白人代表の欧米列強「とくにアメリカ」と黄人代表の日本の衝突、両者の「未来に於ける大戦争」が起きる危険があるというのである。⁽⁵⁴⁾

右のように蘇峰は、日米両国はこのまま行けば衝突し、戦争に至らざるを得ないと予見していた。⁽⁵⁵⁾しかし彼はアメリカとの戦争を避けたいという気持があった。大戦勃発当初から蘇峰は、日米葛藤は両国にとって「此上なき不幸」であるとし、⁽⁵⁶⁾その後「日米の親交は、吾人の希望也」と述べている。⁽⁵⁷⁾そこで第二に彼は、戦争を避けるための方策として次のような提案を行った。すなわち日本も海軍力を強化し、アメリカとのバランスをとることによって安定を保つべきだというのである。「如何に米国が、太平洋に覇威を揮はんとするも、其の勢力、我と相ひ均しきに於ては、無益也。」日米の力がほぼ同等で、拮抗しているならば、アメリカが攻勢に出ること

は不可能だというわけである。このように蘇峰は軍事力のバランスによる平和の維持を望んだが、もしその均衡が崩れるならばどうなるか。日本が一步退けば、米国は二歩進み来る、日米間に多少の差が開いたとき、すなわち日本がアメリカよりも劣勢になったとき、「太平洋が、不太平洋となるの日を、記憶せざる可らざる也」と彼はいふ。さらに、「世界随一の富国」である米国は日本と均衡を保つ上で何ら痛痒を感じないが、諸事逼迫するわが国にとっては頗る迷惑である、しかし国家の安危存亡には代えられない。彼が巨棒をもって来れば、我も巨棒をもって守り、武装の均衡を保つことにより、両国が互いに争うことの不利を自覚させ、「交譲妥協の精神」に立ち返らせなければならぬ。いかなる場合でも我から手を出してはいけない。自分は「徹上徹下平和を以て、始終せんことを期す」。しかしこれは口舌や道理によってできることはできない。「実に力の力に頼る可き也。即ち武装の力に頼る可き也」というのである。⁽⁵⁸⁾

このように蘇峰はアメリカと海軍力のバランスを保つことによって、日米が「交譲妥協の精神」に戻るよう望んだ。そのため翌大正六年七月、帝国議会で同年度の追加予算が成立し、八・四艦隊計画が承認されると、これを支持して次のように述べている。⁽⁵⁹⁾

日米親交の道は、唯だ一あるのみ。他なし米国をして我を敬憚せしむるのみ。米国若し我を以て、有力なる隣邦とせば、必らず我を以て、親友とせむ。米国若し我を以て、與に議するに足らずとせば、如何に我より進んで、彼の驕心を買はんとするも、無益の沙汰のみ。即ち我自ら恃む所ありて、始めて日米の親交を恃む可きのみ。切言すれば、帝国の海軍拡張は、日米親交の捷徑也。

蘇峰は、日本海軍の増強こそが日米戦争を避ける唯一の道であると考えたのである。この考えはその後とも変わらず、大戦後の彼は英文著書『日米関係』(Japanese-American Relations)を出版してアメリカ人に直接訴えかけようとし、またワシントン会議、ロンドン会議で日本が主力艦、補助艦のどちらにおいてもアメリカとの同等を

達成するよう主張したのである。⁽⁶⁰⁾それは、彼の主観においてはアメリカへの敵対を意図するものではなく、逆にアメリカとの関係安定化を望むがゆえになされたのであった。

以上、本章では大戦期蘇峰の対米観の主要部分を概観した。アメリカの日本移民排斥運動、経済成長、海軍力増強（とくにダニエルズ建艦計画）は彼に大きな重圧をもたらした。それに対して蘇峰が望んだのは、アメリカとの軍事的均衡による平和の達成、日米親善の復活であった。しかしアメリカは日本へ一方的に反感と敵意を向けて来ると被虐感を募らせていた彼は、さらに別の形で同国に対応しようと試みた。次章では、アメリカへの抵抗手段としての蘇峰によるアジア・モンロー主義論を検討してみたい。

二 アメリカへの抵抗——「亜細亜モンロー主義」

人種、経済、軍事の三問題をめぐってアメリカに不快感ないし脅威感を募らせる蘇峰は、二つの言動によって対処を試みる。第一にアジア・モンロー主義を主張し、アメリカの対日姿勢に抵抗すること、第二にアジア・モンロー主義の一環として「日支同盟」を主張し、中華民国の抱き込みを図ることの二点である。最初に蘇峰のアジア・モンロー主義論を見ておこう。その内容をまとめると次のようになる。⁽⁶¹⁾

米国のモンロー主義は、①新大陸の外には干渉はしない、②その代わり欧洲諸国も新大陸に干渉するなというものがあった。ところが米国は得手勝手なもので、極東問題については多大の利益が関係するから自分にも発言させよというこれは「自分の物は自分の物、他人の物も自分の物」というようなもので、「己が欲する所を人に施せ」というキリスト教の金言に反する。

白人は自分たちの間では平等、博愛、人道を唱えるが、他に対しては白人独尊主義をとる。彼らは宗教をヘブライ人、

文字をフェニキア人、天文、化学、数学をアラビア人、羅針盤や火薬をシナ人から学んだことを忘れ、東洋人を劣等人種として差別する。この白人独尊主義に対して日本が処する道は二つしかない。戦々兢兢として自ら擬白人になるか、それとも彼らの長所を採ってわが短所を補い、研磨精進してすべての点で白人以上の資格を備え、事実の前に彼らを承服させ、かつ東洋人を導き援けて白人と対等の交際をなさしめるかのどちらかである。すでに独立確保、国権回復を果たした我々は、東洋の先覚者として後者の道に進み、蹂躪されたアジア人の権利を回復する責任があるのではないか。

それは言い換えればアジア・モンロー主義の達成である。欧洲は欧洲人、南北米洲は南北米洲人がしているように、アジアのことはアジア人が処理する東洋自治主義である。スエズ以東は日本を除いて白人の支配下にあり、東洋人は東洋の問題を欧米人に一任している。それは意気地なく卑屈なことではないか。しかしながらアジア人といっても白人と交渉できるのは差しあたり日本国民だけであるから、アジア・モンロー主義は日本人によってアジアを処理する主義である。もし日本が東洋の盟主としての責任を果たさなければ、他の盟主〔欧米〕に叩頭する運命を甘受せねばならない。日本の使命はアジア・モンロー主義を完全に遂行し、「世界に於ける黄白人種の、均衡を恢復する」ことである。わが力で善を行い、東洋人の卑屈を扶け、西洋人の跋扈を制するのだ。

ただしアジア・モンロー主義は、偏狭で理不尽な攘夷論ではない。欧米人の勢力を現状維持したままで、今後アジアの問題は白人の厄介にならず、アジア人が当たることを主眼とする。東洋自治の結果、東漸してきた西力が西へ戻るのであれば、それは彼らが所有すべきでない物を元の持主に返した、アジア人が本来もっていた権利を回復したということにすぎない。

このアジア・モンロー主義を実行するために、日本人は他の東洋人から敬愛され、白人から畏怖される存在にならなければならない。また日本が力を誤って逆に白人を圧迫するような下劣なことは認められない。さらに東洋自治論は誤用すると白人排斥論から世界征服論となり、我の限りある力で他の限りない力と戦って破滅に至る可能性があるのだ、その点に注意する必要がある。

自分の究極の理想は、日本が「東西融和の仲介者」になることである。東洋人の急先鋒となって白人を退治するので

はなく、白人に東洋を理解させ、真の四海兄弟の実をあげるための手引者になることだ。白人の固陋な人種偏見を打破し、東西文明は決して相容れないのではなく、また黄白人種は先天的な怨敵ではないことを明らかにした上で、お互いが平等の立場で握手するならば、四海兄弟、万邦一家の理想は必ずしも不可能ではないことが予想される日が来ることを疑わない。

以上が蘇峰のアジア・モンロー主義論の要約である。まずアメリカはモンロー主義を掲げて米大陸への干渉を許さないのに、極東問題には発言する手前勝手な国であるという。そうした自己中心的なアメリカ人は、ヨーロッパ人とともに、白人独尊主義をとり、東洋人を劣等人種として支配差別するが、日本は東洋の盟主としてアジア人の自治を回復し、白人と黄人の平等を実現しなければならないというのである。こうした蘇峰の主張は直接的には、前章で見たアメリカの日本移民排斥運動、満洲、中華民国への経済進出の気配、米海軍の大幅増強といった状況の中で打ち出されたものであり、その点で彼のアジア・モンロー主義は一面において自国の誇りを守り、国益を維持拡張し、安全を保証するための手段であった。それとともに蘇峰は、アジアへの義務、コミットメントを強調力説する。欧米人の人種偏見を改めさせ、東洋と西洋の平等を果たしたいというのは、遅くとも当時より約二十五年前の明治二十年代から彼が唱えてきたものと変わっていない。日露戦争中の東西文明調和論、大正初年の白閥打破論がこのアジア・モンロー主義論となり、さらにそれが延長されて昭和戦前、戦中期の世界水平運動論、大アジア主義論、大東亜共栄圏論へと発展していくのであるが、そうした中で東西の平等を訴える蘇峰の基本的な考え方は一貫していた。⁽⁶³⁾

一方、第一次大戦期のアメリカでは、少数派ではあったが蘇峰の主張を支持するかのような意見が存在した。その一つが『アウトトルック』誌に掲載された宣教師カーライル・V・ヒバード (Carlsle V. Hibbard) による「日本は膠州をどうするか？」である。⁽⁶⁴⁾ 日本軍がドイツ租借地の膠州湾一帯を占領すると、アメリカでは日本の

領土的野心、侵略性を指摘する声があがったが、これに対してヒバードのこの一文は日本に軽々しく不信感を向けることを戒めている。それによると、日本はこれまで常に条約上の義務に忠実であり、中華民国に膠州返還を約束してきた。「清国を分割して日本に脅威を与えてきた」ヨーロッパ列強が山東の領土保全を守り、同地を閉鎖しないことを保証したとき、アジア・モンロー主義 (Monroe Doctrine of Asia) が承認を得たとき、日本は膠州を中華民国に返還するだろう。それは寛大な行為、国家的利他主義のユニークな実例となるであろう。また日本が今まで十年間、満洲で達成してきた成果 (①商業発展、②治安向上、③鉱山開発、④教育向上、⑤衛生、医療進歩) を考えるならば、日本が留まる間、膠州にもこうした事業が期待できるだろうという。⁽⁶⁵⁾『アウトルック』にこのような意見を見出した蘇峰は、それを読者に紹介した上で次のように述べた。「吾人は米国の論者中に、東亜に於けるモンロー主義なるものを、東亜の為に道破したるを悦ぶ也。」米大陸は米人、東亜は東亜人、欧洲は欧洲人によってその所を得れば公平なのであり、もし米人がキリスト教の「己れが欲する所を人に施す」を目指すならば、東亜の問題に余計な干渉を慎むのは当然だといふのである。⁽⁶⁶⁾

さらに蘇峰は同じく『アウトルック』に掲載された「日本と中国」(“Japan and China”)と題する論説にも着目している。⁽⁶⁷⁾この文章は、アメリカでは反日宣伝によって日本の意図が疑われているが、東アジアの場に自らを置いてみなければ日本を本当に理解することはできない。日本人にとってのアジアは、アメリカ人にとっての北米、中米、南米、ヨーロッパ人にとってのヨーロッパに相当し、日本人もモンロー主義をもつのであって、彼らがアジア人のためのアジアを保つよう強く望むのは当然であるという。また中国は西洋の進出者に対して無力であり続け、その弱さが日本に危険をもたらすのだとし、日本がそうした国を保護し、将来の開発余地を先取りしようとするのは「全く正当な野心」であるとする。このように日本の中華民国に対する権利を認めた上で、同論説は以下のように結論づける。すなわち、すべては日本人が中国における特権を行使する際の精神にかかってい

る。彼らがもしその特権を抑圧的、利己的に行使すれば、西洋の信頼を喪失し、非難を受けることになる。他方、もしアジア・モンロー主義〔Monroe Doctrine for Asia〕を確立し、それが自国の勢力拡大ではなく、地球上の大きな地域の保護発展をはかるものであれば、文明に対してユニークな奉仕を行う機会を得ることになるだろうという。

右のように『アウトトルック』は日本にアジア・モンロー主義実行の権利を認めた上で、それを日本が善用するよう望んだが、その主旨は蘇峰のアジア・モンロー主義論と実によく似ている。したがって彼は「我が意を得たり」の感を深くしたことであろう。『国民新聞』はこの文章を二回に分けて翻訳、紹介し、蘇峰が以下のようなコメントを加えている。『アウトトルック』のような有力な言論機関が「極めて公正、允当なる觀察」を下したのには「快心欣情の事」である。同記事の翻訳を一読した読者は、その論旨が私の意見といかに見事に一致するかを知るだろう。自分はしばしば米人に、その身を日本の位地に当てて考えよと述べてきたが、『アウトトルック』記者はそれを行うだけでなく、日本人の胸奥を忖度して余すところがない。米国の輿論がこのようであれば、日米関係が円満でないことを憂える必要はないのだが、としている⁽⁶⁹⁾。

以上のように蘇峰は『アウトトルック』に掲載された二つの論説に自己のアジア・モンロー主義を裏付けられ、アメリカ輿論がそれにならうことを望んだ。『アウトトルック』はそれ以外にも親日的な意見を数多く載せており、例えば欧州戦線に派遣された日本の医療援助隊の活躍、日本国内におけるドイツ人捕虜への手厚い保護を伝え、日本移民排斥に反対するアメリカ知識人の声、膠州獲得後の日本に猜疑の目を向けることを戒める意見などを取り上げている。また約束を守る上で信用に値する日本が中華民国の指導者になることを支持するという意見、二十一条要求に関して北京は捏造と推測、誇張の源となっており、同地の非公式情報報源から来る主張は疑われるべきだとする見解を載せている。さらに日中交渉をめぐって、いわゆる日本の要求なるものの性質が明らかとな

るまでは日本と中華民国の双方に何らかの判断を下すべきではないとする社論を掲げた。⁽⁷⁰⁾ それらはあたかも日米蜜月時代といわれる日露戦争期のアメリカの対日観をそのまま継承したような意見であり、その当時から『アウトルック』を購読してきた蘇峰は、アメリカにもかつての考え方を変えずに日本を見ている言論人がいるのだと感じたことであろう。しかしながら第一次大戦期のアメリカでは『アウトルック』のような親日的メディアは少数派であり、むしろ日本に批判的な議論が大勢を占め、アジア・モンロー主義がアメリカ側に受け入れられる余地は乏しかった。⁽⁷²⁾ 蘇峰もそうした言説を目にしており、その一例としてジェファースン・ジョーンズ著『青島の陥落』(The Fall of Tsingtau)がある。これは先の『アウトルック』の諸論説と同年(大正四年)に発表されたものであるが、両者の対日観はまさに対照的であった。ここで同書の内容を見ておきたい。

大正三年十月三十一日、日本軍は青島のドイツ要塞への総攻撃を開始し、十一月七日にこれを陥落させた。著者のジョーンズは記者として山東半島に上陸した日本軍に従軍し、同軍司令部に出入りして、派遣軍司令官の神尾光臣陸軍中将(久留米第一八師団長、のち青島要塞守備軍司令官)らと交わるとともに、要塞への最後の攻撃を観戦することを許され、また戦闘後に挙行された日本軍の慰霊式も見学している。⁽⁷³⁾ このように日本から便宜を図られたものの、ジョーンズの筆致は日本に批判的なトーンで覆われていた。彼によると、日本は中国から台湾、遼東半島、朝鮮を奪ってきたが、今や山東を狙っている、日本の行動は加藤高明外相がいうような「極東平和」のためではなく、中国支配の野心にもとづく活動であるという。⁽⁷⁴⁾ さらに欧州戦線でドイツがベルギーの中立を破り、世界の注目を集める間に日本は同じ中立違反を犯し、ドイツ租借地を越え、そこがまるで自分の領土であるかのように膠州〔の青島〕から済南に至る山東鉄道に沿って西へ進軍した。同鉄道の占領を目指す日本は中国軍の撤兵を要求し、ドイツの武力威圧は日本のそれへと置き換えられた。平和的な山東の社会に暴力を行使した日本は中国支配のためさらなるステップに進み、高圧的態度で行動を続け、総督〔神尾中将〕を置いて膠州の軍事

的支配を開始する。膠州はドイツの占領下にあったときですら中国の領土であることをやめなかったのに、日本は既存条約、中国の主権に反して青島税関に日本人官吏を配置したとジョーンズはいう。⁽⁷⁵⁾さらに日本は、アジアにおけるモンロー主義 (Monroe Doctrine in Asia) を計画しているが、我々「アメリカ人」のモンロー主義は日本がシナに提示した次のような帝国主義的条項をもっていたらどうかとして、以下「二十一カ条要求」の英訳を掲げて読者に紹介する。ただしそこに記された第二号一、五―一、第五号四、六は実際の原文と異なり、第三号二、五については原文に該当文がない。したがってジョーンズのいう日本の要求なるものは正確な情報に基づいたものではなかったが、彼はそこに日本の中国支配の夢がアウトライン化されている、この要求に中国はやむを得ず賛成せざるを得なかったのだとする。⁽⁷⁶⁾その他にもジョーンズは、日本兵が笑いながら竹の杖で苦力の頭や足を叩き、美しく彫刻された家具を略奪し、あるいは日本人が中国の行商人に急に飛びかかって品物を奪うといった光景をとり上げ、日本の武士道を疑問視する。青島に到着する前、日本滞在中も日本人の日常生活に武士道を見出すことができなかったというジョーンズは、なぜ英米人は日本人の武士道を賞賛するのかといふかった。⁽⁷⁷⁾

右のように日本の野心と傲慢、侵略性を指摘する同書は、アメリカにとって日本がいかに脅威であるかを次のように説く。日本はドイツ領太平洋諸島を手に入れるならば、アメリカと戦争を行うとき、ハワイ、グアム、フィリピン群島の連絡をブロックすることができる。ドイツは太平洋から除去され、ロシアは中国の分割を熱望し、イギリスは同盟国日本への責務上沈黙する中で、日本は直ちに太平洋の独裁者、中国における支配的パワーとなるのであり、これがアメリカと日本の間の現実問題である。戦争が起るかどうかは疑わしいように思われるが、もし米日間に戦争があるとすれば、カリフォルニア土地法のような法律制定が「日本側にとって」便利な口実になるだろう。戦争の理由は「日本の野心」にあり、この野心と中国に対するアメリカ人の態度如何の中に米日戦争の危険がある。アメリカは太平洋に基地をもち、中国に対する長く誠実な友情をもって日本の野心に立ちは大

かっているのだという。⁽⁷⁸⁾ このようにジョーンズは、日本の中国支配の野望を力説、警告し、アメリカがそれを阻止すべきことを暗に促したのである。

これに目を通した蘇峰は次のような不快感を表明した。近頃、米人ジョーンズ氏が『青島の陥落』なる一書に公にしたが、その日本、日本人評は「頗る米国式を發揮したるもの」で、「日本を思ふ存分に、黒く」描いている。ジョーンズによれば、日本は「欧州列強の妥協と後退によって太平洋支配の」千載一遇の機会を迎えているが、米国がいるため野望を十分發揮できないでおり、日米和戦の鍵は結局、両国政府のシナへの態度如何にあるという。東洋における英米人が日本の前途をいかに觀察しているか、それを心得ておく必要があると彼は身構えた。⁽⁷⁹⁾ このように蘇峰はジョーンズ『青島の陥落』のような『アウトバック』と正反対の文献を通じて、従来から抱く「日本を思ふ存分黒く描く米国式」とのイメージを改めて心に刻み、アメリカ側にアジア・モンロー主義を受け入れる余地が乏しいことを認識したのである。

こうしてアメリカとの間に大きな隔たりを感じる蘇峰は、大正六年四月、アメリカが大戦に参加し、連合国のメンバーとなっても、同国に対して冷やかかなままであった。米国はあたかも古の十字軍のように、民主主義のため、軍国主義退治のため参戦したというが、実際は南米からドイツ勢力を排除してこれに取って代わり、かつドイツが真の脅威となる前に打撃を与えるためであらうとして、ウィルソン大統領の理想主義に共鳴することもなかった。⁽⁸⁰⁾

そうした一方で蘇峰は、アメリカと中華民国の接近に不安を覚えていた。よく知られるように第一次大戦期のアメリカ人は、アジア太平洋における日本の勢力拡大を警戒する一方で、辛亥革命を経て誕生した中華民国に共和政体への期待と好意を傾けがちであった。ウィルソン大統領も日本についてはほとんど知識をもたない反面、⁽⁸¹⁾ 中華民国に「センチメンタルな」思い入れを抱いていた。⁽⁸¹⁾ アメリカが心理的に日本から離れ、中華民国に接近し

たことは、蘇峰に日米中の三国關係を強く意識させることになる。従来から彼は日本が資源を獲得し、かつ商品の販路を確保するため、アメリカの満洲、中国への經濟進出を警戒してきたが、辛亥革命後の新たな米中關係が日本の權益にマイナスの影響をもたらすのではないかと恐れ、大戦前から「米支同盟の説さへも、世上に喧伝しつゝある」と警告していた。⁽⁸²⁾そうした蘇峰の不安は大戦勃發後さらに高まり、例えば以下のようにいう。遠交近攻はシナがいつも用いるやり方で、袁世凱はアメリカを利用して日本に当たろうとし、アメリカは六国借款団から脱退〔大正二年〕して抜け駆けの功名を得ようとしている。陝西省石油問題などから見て「支米の提携は、事實上成功し、帝国の極東に於ける地位は、頗る圧迫を被りつゝあり」、その一方で「支那の排日熱」は旺盛で、シナ官憲は滿鉄沿線以外に日本人が足を踏み入れるのを許さず、日本人は随所で間諜のごとき取り扱いを受けているという。⁽⁸³⁾とくに二十一カ条要求に対して中華民国、アメリカの反發が高まると、米中の結びつきを一層危惧した彼は、言葉の巧みに卓絶するシナ人は欧米の新聞雑誌に排日論を掲げ、國際輿論の力を借りて日本を制しようとするが、とくに注意すべきは宣教師、新聞記者など多年現地に滞在してシナ化した西洋人（とくにアメリカ人）による日本排斥であるとの注意を喚起した。⁽⁸⁴⁾

右のように警戒する蘇峰は、米中接近に楔を打ち込み、中華民国を日本側に引き込むべく「日支同盟」論を提唱する。これは彼のアジア・モンロー主義の一つの具体化であり、また同主義を補足するものでもあった。「日支提携は、東亜の大局を支持する唯一の楔子」であると主張する蘇峰は、まず大正四年五月九日、中華民國政府が二十一カ条要求を受諾すると、「我が日本は、自から進んで極東平和の番人たらんとす」、今回を好機として双方の民間外交を奨励し、互いに意思を疎通して「兩國の合体」を期すべきである、その手始めとして日支兩國の新聞記者、言論界が提携して民心を融和し、第三者（アメリカとドイツを暗示）による離間、中傷の余地をなくすよう希望するとした。⁽⁸⁵⁾

右のように日支提携を唱えた蘇峰は、次到大正六年九月から十二月にかけて満洲から華北、華東にかけて視察を行い、政府要人と意見を交換した。⁽⁸⁶⁾ その間、彼は北京の紫禁城や明の十三陵、道教の聖地である泰山、曲阜の孔子廟、孔林（孔家の墓地）をはじめとする名所旧跡を訪ねており、また北京の古書店で珍書を漁り、文人と交流するなど、この旅が一面において観光の性質をもっていたことは間違いない。しかしながらその一方で次のような人々と会見している点から、その主目的が別のところにあつたことは明らかである。⁽⁸⁷⁾

九月二十七日	奉天	張作霖（奉天督軍）
十月 一日	吉林	孟恩遠（吉林督軍）、郭宗熙（吉林省長）
十月 七日	大連	中村雄次郎（関東都督）、国沢新兵衛（満鉄理事長）
十月 九日	旅順	中村都督、肅親王、宮尾舜治（関東都督府民政長官）
十月 十六日	北京	段祺瑞（國務總理）、馮国璋（代理大總統）
十月 十七日	北京	段芝貴（北京衛戍）、梁啓超（財務部総長）
十月 十八日	北京	曹汝霖（交通部総長）、湯化龍（内務部総長）、徐世昌（閑居中、翌年大總統）
十月 十九日	北京	汪大燮（外交部総長）
十月 二十日	北京	〔午餐会〕 梁啓超、曹汝霖など
十月 二十三日	張家口	田中玉（察哈尔都統）
十月 二十八日	北京	林權助（駐華公使）、大谷光瑞（中華民國政府最高顧問）
十一月 二日	漢口	〔午餐会〕 王占元（湖北督軍兼省長）、瀨川浅之進（漢口総領事）
十一月 三日	漢口	〔日本駐屯軍兵営訪問〕 神頭勝弥少将（中支那派遣隊司令官）

十一月 五日	南昌	陳光遠（江西省督軍）、〔晚餐会〕河西（九江領事）ほか日本実業人
十一月 八日	南京	李純（南京督軍）
十一月十三日	上海	〔日中記者晚餐会〕
十一月十四日	上海	孫洪伊（前内務総長）、戴季陶（別名、戴天仇または戴伝賢）、柏文蔚、丁人傑
十一月十五日	上海	〔同地新聞各社の招待会、外字新聞記者の晚餐会〕
十一月十六日	上海	岑春煊、譚人鳳、孫洪伊、柏文蔚、戴季陶、譚延闓、丁人傑、蔣尊簋、彭程萬
		〔内外綿会社の工場見学〕武居綾蔵（内外綿会社取締役）
		〔英字新聞記者午餐会〕
十一月二十一日	上海	鄭孝胥、李経邁（李鴻章実子）
十二月 三日	青島	本郷房太郎中将（青島守備軍司令官）
十二月 四日	青島	同右

このように蘇峰は北京で政府閣僚と、また上海その他でも別系統の政治家とくり返し面会している。しかし彼の旅行記には談話の中身がほとんど記されておらず、もし書かれていたとしても「南昌で江西省督軍の陳光遠と談じた際は、南昌鉄道延長問題から欧州大戦後の東アジアの大勢に話題が及んだ」といった程度で、詳しい内容は明らかにされない⁽⁸⁸⁾。それはまだよい方であって、張作霖奉天督軍、段祺瑞國務總理、馮国璋代理大總統、李純南京督軍との談話については、あえて記さないとしており、その内容が政治的な機微に触れるものであったことがうかがえる。そもそも日本言論界の雄とはいえ、民間ジャーナリストの蘇峰が北京に出かけて直ちに最高指導者の國務總理や代理大總統に会えるわけがなく、日本政府やその周辺からの紹介があったことは間違いないであ

ろう。また同じく北京で段芝貴、梁啓超以下の大臣を含む人々に面会できたのは、同地で長年幅広い人脈を構築し、情報収集と対中工作に従事してきた坂西利八郎陸軍少将の手引きによるものであった。⁽⁹⁰⁾ 北京を訪れる日本の要人は坂西を頼りにすることが多かったが、蘇峰もその一人であり、さらに日中友好工作を行う点で坂西と彼は共通の目標をもっていたともいえる。そうした協力を得ながら蘇峰は旅行を進め、大略次のような感触をつかんでいた。すなわちシナの政局を見ると、直隸軍閥派はかつての秦、南方革命派は楚で、二十世紀の今日なお秦楚の戦いをくり返している、ただしその大体は軍国主義を主とする北派、民権自由主義を主とする南派、従来の孔孟主義を主とする復辟派の三派に区分すべきか、というのである。⁽⁹¹⁾

右のように現地踏査を進めるとともに、蘇峰は中国人を日本側に引きつけようと試みた。その一つとして例えば、十一月十三日、上海の日本人倶楽部で開かれた日中両国記者の晩餐会があげられる。この席上、蘇峰はスピーチを行ったが、彼自身が旅行記に書いているのによれば、このとき自分は「別に何等の意見をも開陳せず、唯だ日支親善の捷徑として、日人支那語を習ひ、支那人日語を学び、其の日常の交際、応接に於て、通訳を用ひず、互ひに自他の国語を以てせば、情意疎通に於て、頗る便宜ならむと云へり」という。⁽⁹²⁾ 日中両国民がそれぞれお互いの言語を学び、コミュニケーションを円滑にしようというわけで、表面的にはありふれた意見のように映る。⁽⁹³⁾ しかし早川喜代次氏による伝記『徳富蘇峰』によると、蘇峰はこのとき「別に何等の意見をも開陳せず」どころか、次のように主張したという（傍線は澤田による）。⁽⁹⁴⁾

支那の各位は英米を崇拜する念強く、日本を小さく見るようであるが、それは大変な心得違いと申す外はない。英米はただ征服欲にかられて来るのみで、真に支那そのものを思つて来るわけではないのだ。若し東洋に日本国が無かったら如何であらうか。日本が支那の為に公認番兵たるが故に、英米は支那に手を出さぬのだ。

日英同盟は残存しているが、英国にとっては、すでに露国と握手したる今日においてこの同盟の必要は薄い。英国は

米国の機嫌を取るためには、日本を犠牲にして顧みない心であることは、前の同盟改訂問題ですでに判明したのだ。東洋の各地における英人の商売仇は日本人である。

米国は米国で同国の帝国主義の第一の邪魔者は日本である。米人の平和的言論に随喜し、百年の太平を夢想することはできない。欧州の大戦の終った暁には、彼等は必ずや東洋にその手を延して来るに違ひはない。支那と日本は決して英米の懷柔に乗ぜられてはならぬ。

支那と日本は唇齒補車の關係で、若し互いに対立すればお互いの大損だ。互いに手を取り合つて、東亜侵略の野心満々たる英米に対せねばならない。日本には反省すべき数々があるが、支那の諸君もどうか反省して貰い度い。しかして日支親善の提携は、日人支那語を習い、支那人日語を学ぶにある。

これは昭和戦前期に取材された伝記の中に示された蘇峰の言葉であつて、大正期より後の時代の心情や文言が混入していることも考えられる。しかしながら第一次大戦期の蘇峰の言論を見ると、ほぼ類似の考え方があちこちにかがえるのであり、右の引用文は当時の蘇峰の本音を示したものであるといつてよい。英米とくにアメリカの攻勢を恐れる彼は、大戦終了後、同国が中華民国を懷柔しつつ、怒濤のごとく経済進出をかけ、日本の權益を大陸から排除するのではないかと危惧した。それを防ぐために、日中両国が互いに手を取り合うことが必要であると中華民国の言論人にアピールし、彼らを味方陣営に引き入れようと試みたのである。

蘇峰の旅行はそれ以前の言動からして、新たに誕生した中華民国の現状を見聞し、政府要人や言論人と意見交換をしながら日中友好工作を進めるといふ目的のために実行されたのではないかと考えられる。その点では明治二十九年から三十年にかけて彼がアジアの英領植民地からヨーロッパにかけて行つた日英同盟工作と類似した面があるといえよう。

大正六年十二月に帰国した蘇峰は以後、アメリカを意識しつつ、くり返し「日支同盟」を提唱している。それ

はかつてロシアを意識しつつ、日英米同盟を説いた彼の姿と共通するものがあつたが、その内容をできるだけ蘇峰の文言を用いて要約すると以下のようになる。⁽⁹⁵⁾

東アジアの大局を処理する上でシナ人を除外することは不可能である。この見地より自分は、心から「日支の親善と提携」を望まないはいられない。

長江流域の土地は豊沃で、しかも鉄、石炭などの鉱物に富む。山東省から山西、陝西省に及ぶ地下の富は測り知れない。自分は山西省の一部を旅行したが、石炭の層が地上に露出しているのを見たのは一度に限らない。シナはこれを放擲して顧みないが、「日支合併」によってそれを開発するのが最もよい。それによって両国ともに利するのであるから、「両者の経済同盟」は自然の流れに即しているのではないか。

日本がシナに対して「経済的同盟」を高唱するには理由がある。日本が商品を販売する上で、シナは主要な得意先となっている。また日本はシナから鉄と棉花を得なければ、経済的に閉塞するしかない。日本は自給自活ができず、シナの供給を計算に入れなければやって行けないのだ。

日支の経済関係は、他国と比べて特種の意義をもっている。英国には足りないものがあつても世界的帝国があり、米国はそれ自体が一世界であり、ただ余つたものを吐き出しこそすれ、不足分はない。しかし日本は人口増大とそれに伴う食料不足の問題を抱え、朝鮮併合によって若干の融通を得たものの、経済的にはシナに依るしかない。つまり英米とシナは売買損得の關係にすぎないが、日本とシナは国運消長、国家死活の關係である。

一方、シナがこのまま天然資源を放置しておけば、「白禍西来」の不幸を招いてどうすることもできなくなる。そこで日本はシナから資源を得る代わりに「支那の巡查」となり、世界に対してその警備にあたる。そうすれば両者の長所を交換できよう。それゆえ「日支攻守同盟」を結ぶべきである。両国の識者が「興亜の大経綸」に思いをいたせば、両者は反目、敵視し合うことはできないはずである。自分たちはアジア人であるという自覚をもち、「日支親善」を実現することが必要である。

日本は日支親善のためシナで有力な新聞雑誌を発行する必要がある。上海の『北シナ日日新聞』[North China Daily

News)は、部数は少ないもののシナにおける英国勢力の重鎮である。日本がこうした機関をもたないのは大きな手落ちであろう。自分は日本もシナも眼中に置かず、ただ「興亜」の大目標を掲げる「日支人協同の一大新聞」を発行させたい。これは至難の業だが、献身的に従事する者がいることを望んでいる。日本人が率先しなければ、英、米、ドイツ、その他から実行者が出るだろう。そのときになって七転八倒しても遅いのだ。⁽⁹⁶⁾

以上が蘇峰の日支同盟論の概要である。それには三つの側面がある。「経済同盟」(日本が中華民国と合同で天然資源開発を行う)、「攻守同盟」(日本は中華民国から鉄、棉花、石炭の供給を受ける代わりに、欧米列強に対して番人、警察官の役割を果たす)、「興亜同盟」(日支提携によりアジア人のアジアを目指す、またそれを鼓舞宣伝する日支協同の新聞が必要)の三点である。これらを見ると、蘇峰の目標はまず日本の国益追求(生存に不可欠な資源と製品販路の確保)にある。ただし相手から取り上げるのではなく、双方に利益があがることを念頭においている。さらに相手から見れば押しつけがましきと受け取られるのではなく、日本による中華民国の警備を申し出た上で、アジアの復興を希求している。すなわち彼の日支同盟論は、まず日本の生存、利益追求をはかるものであるが、その主観においては私利一辺倒ではなく、相手方の利益、ならびに西洋の支配下にあるアジアの復活興隆をも考慮に入れている。蘇峰は「日本が、支那より利益を取るのみにあらずして、支那に向つて利益を与ふる」こと、「自国を防衛するのみならず、併せて支那を防衛する」ことが必要であるとしていた。さらにシナにとつても日本人を敵にするのではなく、「利用」するのが最善の策ではないかと述べている。⁽⁹⁷⁾日中関係はテイク・アンド・テイクではなく、ギブ・アンド・テイクでなければならないというわけである。しかしながら蘇峰自身、日支人協同の新聞発行は至難の業だと洩らしていることからもうかがえるように、中華民国の排日を前にして日中の融和、同盟実現の難しさを彼は十分認識していた。それだからこそ逆に一層、両国提携を力説、強調したのであろう。そうした中で蘇峰は、対外協力についてはアメリカから学ぶべき点があると考えていた。日本人は取ることを

知っているが、与えることを解さない、しかし欧米人、とくにアメリカ人は違ふと彼はいう。彼らは中華民国に病院、学校を作り、多額の金を投じて留学生を誘い、特別の便宜を与えている。つまり米人は多大の捨石をシナに置いているが、これがやがて物をいうときが来るのを忘れてはならないというのである。⁽⁹⁸⁾ このことを蘇峰は現地で実感していた。当時、アメリカ宣教師の協力支援によって中華民国に創立された学校として北京の清華大学、南京の金陵大学（後の南京大学）などがあつたが、蘇峰はその一つ、済南の齊魯大学を見学している。同校は英国浸礼教会、米国長老教会などの協力により設置され、文科、理科、神学科から医科、付属病院までを擁したが、ここを訪れた彼はその規模と敷地面積に驚いた。案内してくれたのはロンドン大学出身で山東省に在住して約三十年という人物であり、この大学では外国人、中国人を問わず教員は皆中国語で教えていること、また付属病院を訪ねる患者は一日三百人を下らず、入院者は常に満員で、入院料も二十錢で足りるといったことを知らされる。さらに大学付属の博物館を訪ねた蘇峰は、教育用に展示された統計、図面、模型の丁寧な説明ぶりに深い感銘を受けた。この齊魯大学を通じて蘇峰は、英米その他の宣教師が「大仕掛の経営」の下、「極めて真面目」に「献身的努力」を行っていることを痛感する。彼ら宣教師の中にこうした献身的努力者がいるという事実は、それだけとて暁天の星のごとく少数であっても、なお暁天の星としてその光を認めざるを得ない、と彼は感動を込めて記している。⁽⁹⁹⁾

右のように蘇峰は対外協力、奉仕という点でアメリカ人から学ぶべきことがあると感じていた。ただし彼は当時、アメリカ人に見られた「中華民国がアメリカと緊密に協力しつつ、キリスト教の理想に導かれて民主主義国になるであろう」という宣教師的発想には共鳴することができなかった。中国古典を愛好する彼は、それでいて現実の中国を「孔孟の国」として理想化することがなく、そのマイナス面もよく知っており、それを明治三十九年と大正六年の二度にわたる旅行で確認していた。つまり蘇峰は日中親善を説いたが、それだからといってナイ

一ツな日中友好論者ではなかったのである。例えば北京に向かう京奉線の汽車中で起きたことであるが、蘇峰、山崎猛（秘書）、玉生武四郎（国民新聞記者）の三人が食堂車で食事をしていると、同じテーブルに一人の中国人壮年が座り、蘇峰らの炭酸水を断りなく飲み始めた。玉生が注意すると、男は逆に居丈高となって「これはテーブルに備えつけのものだ」と述べ、さらに数杯を傾けた。結局、給仕にいわれて弁償はしたもの、何等の謝罪もしなかったという。⁽¹⁰⁰⁾ こうした人物に接した蘇峰は、日本とシナは同文同種といながら多くの点で相違がある、日本人のシナに対する一大誤謬は日本をもつて直ちにシナを律することであるという。⁽¹⁰¹⁾ さらに『支那漫遊記』の中で彼は中国ならびに中国人に対して次のような見方を示している。

・シナ人の辞令は人を魅するに余りあり、御馳走と御世辞に取り巻かれて懐柔されない者があれば強者である（一二九頁）。心に思わないことを口に語り、表裏二様の使い分けを行う。その二重性格はほとんど先天的で、これを無意識に行うことができる（五二四頁）。

・「巧詐的」はその国民性で見逃せない特色である（四八四頁）。生まれながらにして蘇秦張儀の術数を遺伝しており、策略を弄するのはほとんど先天的性格である（三九二頁）。

・「個人万能、団体零能」である。彼らの合同は組織的でなく、烏合の衆にすぎない。組織、合同の源は規律に服従する遵法的精神と公德心にある。この二つは個人主義万能のシナでは欠乏している。これが衆があつても大をなすことができない所以である（四九四―四九五頁）。

・「利」の一字は彼らの生命である（五四三頁）。個人としてはまことに抜け目なく働くが、一旦協同事業となればたちまちその会社を食って私腹を肥やそうとする。これは社長、重役から小使、苦力に至るまで一貫徹底した傾向である（四六五頁）。

・事大主義者であり、有力な威勢に対しては無抵抗者である、否、むしろこの威勢を利用するにおいて抜け目なき実利者である (三九六頁)。雷同的で、流言飛語、訛伝風説は非常の勢いで国内を席捲する (四九五頁)。
 ・極めて現実的でありながら極めて空想的、極めて物質的にして極めて理想的である。損得勘定以外に何物もなしと思えば、かえって体面をしかつめらしく持ち出して来る。一国においても一人においても幾多の矛盾する性格がある。彼らを見てその一端をとらえ、これをもって百事を律すれば、大いに悔やむことになるだろう (二八二—二八三頁)。

右のように蘇峰は觀察していた。これに先立つ明治三十九年、清国を訪れた際、彼は「論語逆読の法」が中国人を解釈する鍵であると考えた。中国では理想と現実とは全く別の世界であり、論語に記された理想をもって實際を判断することはできず、むしろ實際を知ろうと思えば理想の逆をとれば当たっているというのがその主旨であった。⁽¹⁰²⁾このように現地踏査に加えて古典の知識や論語逆読の法を用いて中華民国を分析する彼にとって、同国に共和制や民主政治を期待するアメリカ人の態度は受け入れることができなかった。蘇峰によるとシナ人は事大的で、決して自主的ではない、強者の袁世凱が帝王となるのはシナの歴史からいって自然であり、皮相な觀察者である白人のようにシナの共和政治が永續すると思うのは「根本からの間違」だ⁽¹⁰³⁾という。日中提携を唱えながらも、蘇峰が相手国をクールに見ていたことがわかる。

以上、本章では、アメリカの圧力を感じた蘇峰がアジア・モンロー主義を唱え、さらにその一環として日支同盟論を提唱した点を考察した。どちらの議論もアメリカの存在を強く意識したからこそ登場したものであり、アメリカに対抗することによって日本の利益と理念を追求するというものであった。また中華民国との同盟といっても、蘇峰の同国への見方は冷徹であり、そのマイナス面を意識した上であえて主張されたものであって、それ

は情緒的な友好親善論というものではなかった。かつて日英米同盟論を訴えた当時の彼は、イギリス、アメリカのマイナス面を認めつつも両国の文学や思想、価値観に強い共感を抱き、それがイギリス、アメリカに接近する一因となっていた。しかし中華民国に対しては、その歴史や古典に深い関心と愛着を抱いていたとはいえず、人生観や哲学の上で強く共鳴していたと言いはれない。したがって管見の及ぶ限りでは、日英米同盟論に賭けたほどの強力な熱意をこの日支同盟論に見出すことはできないのである。

三 アメリカへの敬愛——「米國魂と自恃の精神」

前章で見たように、蘇峰は移民、経済、軍事の三問題から「傲慢で自己中心的なアメリカ」のイメージを強め、そこに不快と脅威を感じ、米中接近をにらみ合わせて、中華民国における利益確保のため、アジア・モンロー主義と日支同盟を唱えた。ただし、そのために彼が単なる感情的反米家であったと即断することはできない。蘇峰は同国を批判する一方で、その良き面、ポジティブな点を明白に認識していたからである。以下この点を検討する。

まず、第一次大戦期の蘇峰は日本人が日本魂を失い、社会主義やデモクラシーなど他国の思想、価値観や拝金主義に傾きつつあるとの懸念を抱いていた。彼の定義によれば、日本魂とは忠君愛国の精神であり、いかなる場合でも君国を第一、自分を第二とし、君国のためには自分の生命、財産、その他すべてを献げる精神を指すという。ドイツにはドイツ魂、米国には米國魂、英国には英國魂があるように、日本にはこの日本魂があり、日本国民がこれを失えば、日本帝国は精神的に滅亡したことになるのであって、教育はこの精神の涵養と応用を要しなければならぬと蘇峰は力説した。¹⁰⁴

右のように蘇峰は、ドイツ魂、英国魂、米國魂の存在をあげつつ、日本人が失いつつある日本魂を養う必要性を説いた。ここで米國魂なるものが引き合いに出されている点に着目したい。それはいかなるものであったか。大戦期の蘇峰は、アメリカの学者ヘンリー・ヴァン・ダイク (Henry van Dyke)、思想家ラルフ・W・エマソン (Ralph Waldo Emerson)、詩人ウォルト・ホイットマン (Walt Whitman) の文章からそれぞれアメリカのスピリットを読み取っており、そこに彼のいう米國魂を解く鍵がある。以下この点を考察したい。

第一にヘンリー・ヴァン・ダイク著『アメリカの精神』(The Spirit of America) である。ヴァン・ダイクはプリンストン大学英語教授で、明治四十一年から四十二年にかけての冬期、米仏両国の相互理解を深めるため、パリ大学などフランスの大学で特別講義を行った。その内容はアメリカ人を動かす根源的な精神についてフランス人にわかりやすく説明するというものであった。ヴァン・ダイクは、人は内なる光に導かれるもので、理想や道徳的信念が人間の歴史において最も重要なファクターになっているという考えをもっており、フランス人にアメリカの姿を知ってもらうためには、アメリカ人の内面にあるスピリットを紹介するのがよいと考えたのである。そうした主旨で行われた講義をもとに、ヴァン・ダイクは帰国後の明治四十三年(一九一〇)、『アメリカの精神』を出版したが、ニューヨーク在住の蘇峰の知人がこれを手に入れ、日本に送って寄こした。当時、日米間の軋轢に悩んでいた蘇峰は、アメリカとはどのような国なのか見極めたいという欲求に駆られており、直ちに同書に目を通してだけでなく、大正五年(一九一六)に改めて読み直し、昭和に入ってから新聞の切抜を同書に貼り付けておくなど、アメリカ理解の手がかりとしてこれを継続的に活用することになる⁽¹⁶⁾。

ヴァン・ダイク『アメリカの精神』から蘇峰はどのようなことを学んだのだろうか。ヴァン・ダイクはアメリカン・スピリットの特徴とその表れとして、①自己信頼の精神、②フェア・プレーの精神、③強い意志力とそこから生まれる精力的活動、④何事も急ぎかつ能率的に行おうとするスピード性、⑤自己組織能力と公共秩序の愛

好、⑥その他（自己開発と自己表現ならびに教育の重視など）を順番に取り上げている。蘇峰はそのいずれについても関心をもち、ラインを引きながら読み進めたが、ここでは同書の最後半にあたる⑥を割愛し、中心部分にあたる①から⑤を中心に見てみたい。

まず、①自己信頼の精神である。ヴァン・ダイクが同書において真先に強調したのがこの点であった。自己信頼とは他人に依存したり服従するのではなく、あくまで自分自身の心に従って方向性を決め、物事を行っていくことである。アメリカ建国前の植民地時代を説明した上で、ヴァン・ダイクは次のように記している⁽¹⁰⁶⁾。

我々はかくしてアメリカ国民の魂〔soul of the American people〕における第一番目の最も有力なファクターに行きつく。それは「自己信頼の精神」〔spirit of self-reliance〕である。これは彼らの初期の歴史にあって支配的であり、かつ形成途上のものであった。それは最初の格闘と努力を続ける彼らを活気づけ、支える内的な力であった。それは宗教的信念によって深まり、実体験によって強化された。それは政治制度、宣言、機構の中に具体化された。それは外国の指導やコントロールを拒絶し、外からの支配すべてと戦った。それは自己決定の権利を当然のものとし、自己開発の力を当たり前のこととした。

このように畳みかけたヴァン・ダイクはさらに次のようにいう（傍線は蘇峰の書き込んだアンダーラインを再現したもの、以下同様）。

それは二世紀にわたる変化と成長の全過程で持続し、今日アメリカ人の精神の中で最も重大かつ減じることのない特質として残っている——それが自己信頼の精神である。⁽¹⁰⁷⁾

右の個所に着目した蘇峰は、アンダーラインだけでなく文章全体にサイドラインも引いている。ここで彼は自己信頼の精神こそがアメリカ人の魂であり、アメリカン・スピリットの中で最重要であることを確認した。またヴァン・ダイクは以下にもいう。

「アメリカ人の」独立の気性、自由への情熱、自ら方向を決定することへの熱望の背後には自己信頼の精神がある。そこからのみ彼らは力と耐久性を引き出す。アメリカを作ったのはまさにこの精神であり、「アメリカ」共和国を維持しているのもこの精神である。エマソンはそれを一文で表現した。「自分自身の足で歩きましょう、自分自身の手で仕事をしましょう、自分自身の心を語りましょう」と。⁽¹⁰⁸⁾

ここで蘇峰がアンダーラインを記した「自分自身の足で歩きましょう」以下の一節は、エマソンの講演録「アメリカの学者」(“The American Scholar”)にその原文が載っている。⁽¹⁰⁹⁾エマソンは自己信頼、すなわち自分自身の内部から湧き上がるものを信じ、それを受け入れ、実行することが人生の基本であると考えており、⁽¹¹⁰⁾そうした主旨に沿って先の引用部分に見るように「自分自身の足で歩きましょう、自分自身の手で仕事をしましょう、自分自身の心を語りましょう」と呼びかけた。蘇峰はヴァン・ダイクだけでなく、その紹介するエマソンの言葉からも、自己信頼の説明を受けたのである。

次に、②フェア・プレーの精神である。ヴァン・ダイクは、アメリカ人が自己信頼を追求しつつも、他人の権利を排除することがない点に着目し、その理由の一つをフェア・プレーの精神に見出して次のように述べている。アメリカを民主主義国として考えることは間違ではない。しかしそこに普及している民主主義の本質と特質——その特徴点、特異性と恐らくはその矛盾性——を理解したいのならば、「フェア・プレーの精神」にその源流を辿らなければならぬ。……

フェア・プレーの精神はその根源において宗教の一種である。……フェア・プレーは実際、次の事実を認めたものである。人間がこの世界において孤独ではないこと、世界は個人的利益のために作られたのではないこと、生存の法則とは博愛の正義のことであり、それは自分も他人も同じように誠実な公平さをもって遇し、統御することである。そして不公正な干渉を働くような人間の組織、秩序はいかなるものでも至上の知恵、至上の愛の意志に反しているということである。⁽¹¹¹⁾

自己信頼を突き詰めると、他人を押しつけても自分の生き方を貫く場合が生じ得るが、アメリカにはフェア・プレーの概念があり、それが自我を統御し、他人に対する公平さを保つ役割を果たしているというのである。ここで蘇峰は自己主張を調節するフェア・プレーの精神の存在を確認した。つづいて、③強い意志力とそこから生まれる精力的活動について、ヴァン・ダイクは以下のように説く。

……〔メキシコと南米は地味、気候、資源でアメリカ合衆国に優るとも劣らないのに、同様の産業発展を見ないのは〕なぜか？ 多くの理由があるだろう。しかし私は次のことを確信している。最重要の原因はそこに住む人々の精神にある。その原因の一つは、強く自信に満ちた意志力〔will-power〕が南米の共和国には欠けているということだ。他方、この意志力こそがアメリカ人をして勤勉かつ仕事の早い人間としたのである。⁽¹²⁾

……私は次のことは真実だと思う。主に産業的成功に向けられた強い意志力が〔アメリカ人の〕生活全般のトーンに強い影響を与えてきた。もしそれ自体のために働くことを本当に愛さないならば、アメリカではそれほど幸せにはなれないだろう。そこでは有閑階級の考えはよくないものである。⁽¹³⁾

アメリカ人の強い意志力が働くことを愛する勤勉な態度を生み出し、同国の産業発展をもたらしたという。そうしたアメリカ人の特徴を体現した人物として、ヴァン・ダイクは鉄鋼王アンドルー・カーネギー（Andrew Carnegie）や発明王トマス・エジソン（Thomas Edison）の名をあげており、この二人にも蘇峰の関心は寄せられた。⁽¹⁴⁾

さらに、④何事も急ぎかつ能率的に行おうとするスピード性である。ヴァン・ダイクはアメリカ人が生活上、いかに早足であるかについて、次のようなあるフランス人の観察記を引用している。

アメリカ人は「素早く」生まれ、「素早く」働き、「素早く」食べ、「素早く」決定し、「素早く」金持になり、そして

「素早く」死ぬ。さらに「素早く」埋葬されるといふことも付け加えておこう。町を横切る葬列は物凄いスピードで走り過ぎる。⁽¹¹⁵⁾

蘇峰自身、かつてニューヨークを訪ねた際、街を行く人々の急ぐ様に強い印象を受けており、右の個所に二重のサイドラインを引いて注目した。最後に、⑤自己組織能力と公共秩序の愛好である。ヴァン・ダイクの説明を聞こう。

……生来の傾向において特にアメリカ的な性質は個人主義である。それは組織されることを好まない。「むしろ」それ自体を組織すること(116)を好む。それは形を求めるが、形式は嫌う。服従よりも自発的な努力の意識をずっと尊び、大切にする。

そうした自発的な組織形成の表れとして、ヴァン・ダイクはシカゴの共和党大会とデンヴァーの民主党大会の例をあげている。個人主義をとるにもかかわらず、アメリカ人は同じ政治目的のために集まり、支持する政治家に対して長時間、声援喝采を送り続けることができる、好きなことに熱中する彼らの姿、「それは驚くべき自己組織 [self-organization] 力を証明している」といふ。⁽¹¹⁷⁾ ここで蘇峰は、個人主義者といわれるアメリカ人が一つの目標のために自らを組織化する力をもっていることを確認した。

以上のようにヴァン・ダイクはアメリカ人の精神とその表れとして、①自己信頼、②フェア・プレー、③意志力、④スピード、⑤自己組織力を指摘し、その各々に蘇峰は着目した。⁽¹¹⁸⁾ その上で彼は、ヴァン・ダイクのいうアメリカの精神を「米国魂」と呼んで読者に紹介している。少々長くなるが、蘇峰のアメリカ観のうちポジティブな面を集約的に示したもので、煩を厭わず引用してみたい。ただし文体は読み易さを考えて現代風に改め、特に重要な文言と考えられる個所のみ鍵カッコをつけて原文を掲げた。⁽¹¹⁹⁾

福沢諭吉のいう「独立自尊」の典型は、米人において見ることができ。いわゆる米国魂とは何であろうか。フーゴ

ー・ミュンステルベルク (Hugo Münsterberg) は自ら指導する精神であるといった⁽¹²⁰⁾。ヘンリー・ヴァン・ダイクは自己に依頼する精神だという。ラルフ・W・エマソンのいう、自分は自己の脚で行き、自己の手で働き、自己の心を語るといいうのも、同じ意味に他ならない。これは実に米国において時間に貫通し、空間に徹底する米国魂である。

米国を偉大ならしめた原因は一つではない。広漠な土地に天地の恵みが豊かであることは、貧しい小国の民が羨むところである。しかし資源があっても、米人でなければあのように富盛になり得ないのではないか。鬼に金棒というが、いかに金棒があっても、鬼がいなければ木棒にすら匹敵しない。「吾人は米国興隆の淵源に溯りて、実に此の米国魂に負ふ所の多大なるを、特筆するを禁ずる能はざる也。」

「自持の精神」について米人に見逃せないのは「精力万能主義」である。米人の眼中に難事はない。彼等は決して愚痴をこぼさない。屋根が焼け落ちないのに、早くも新築に取り掛かる。ハドソン川の大鉄橋、パナマ運河もそうして作られた。もし米人を黄金崇拜というならば、恐らくそれは誤解であろう。彼等ほど黄金の価値を理解した者はいない。しかし彼等は金もうけのために活動するのではなく、むしろ活動するために活動するのだ。米人は一種の活動狂である。何事かをなさんとする意志は、常に彼等の心を支配している。その証拠に、遊んでいる方が余計に金もうけのできるような金持連中が死ぬまで営々として稼ぐことは、その日暮らしの労働者に譲らないではないか。

さらに米人に奇特なのは、その仕事が大仕掛なことだ。米人は各々「自持の精神」に富んでおり、分割、分立が持ち前とならざるを得ないはずである。ところが実際はこれに反するのはなぜか。フランス人はエッフェル塔を建ててその高さを誇るが、ニューヨークにおいては街ごとに数個のエッフェル塔「摩天楼」がないことはない。世界第一は米人の理想である。いかなる事物も世界第一でなければ米人には承知できない。その結果として、彼等は外力の圧迫を待たず、指導も用いず、彼等相互の申合せでどのような大事業でも仕組むのである。その結合が概して面白く行くのは、彼等の間に「公平の精神」が流通しているためである。つまり互いに相応の割前に満足し、誰も他から多く取ろうとせず、少なく与えようともしない。各々本分を超えないのである。

最後に一言すべきなのは、米人の「急忙主義」である。時は金なりとは世界共通の警句であるが、米国では時間は黄

金以上である。米人は生まれ、働き、食べ、決め、富み、死ぬ、すべて急忙で、葬式さえも全速力で街頭に駆け行くとは仏人の悪口であるが、その一半は真理といわざるを得ない。低徊趣味は米人の概して解せないところである。

彼等は途中の労を省くために快速を好むのではなく、時としては快速のために快速を好む観がある。そのため世間一切の事に拘束されない米人が一つ囚われていることがあるとすれば、それは彼等が余りに能率を増加することに熱中する点であるといわざるをえない。しかしこれは米人にあつてこそ欠点であるが、他国人はその欠点を学んでもなお及ばないことを恐れるのみである。

以上のように蘇峰はいう。これを整理すると、①自己信頼、自恃の精神こそが米国魂である、②この魂が米国興隆の源である、③そうした魂をもつアメリカ人はきわめて精力的である、④自らを恃むアメリカ人であるが、だからといって分立するのではなく、自発的に協力し、公平な精神の下で大規模な仕事をなす、⑤アメリカ人はスピードと能率の向上に熱中するが、これには外国人はかなわないのではないかと恐れるというのである。

この蘇峰による「米国魂」解説は、その大半が先のヴァン・ダイク『アメリカの精神』の記述と重なり合っていることがわかる。蘇峰が同書をいわば種本、参考図書とし、そこに自己の見聞を加味しつつ説明を展開していることは明らかであろう。蘇峰はここで見られるように、アメリカ人の優れた点、ポジティブな面をはつきりと認識していた。たとえアメリカの日本移民排斥運動にナショナル・プライドを傷つけられても、相手の良い面を見て、そこから学ぼうとする態度は失われていなかったのである。

また蘇峰のこうした姿勢は、アメリカへの対抗意識から生じたものであったとも考えられる。当時の彼は、日本人が明治天皇の崩御によって中心点を失い、日清、日露戦争期の意気を失った結果、シーメンス事件をはじめとする諸問題を起こすようになったと観察し、すみやかに「国民の自信力」を回復、發揮して弱肉強食、生存競争の世界において日本帝国の地位を向上させなければならぬと考えていた。⁽¹²⁾とりわけ日本を仮想敵国と見るア

アメリカとの競争に打ち勝つには、少なくともアメリカ人と同等の、できればそれを上回る自己信頼力や長所を持たなければならぬというのが蘇峰の気持であつただろう。同国からの圧力を感じるからこそ、彼は敵を知り、己を知るといつつもりでアメリカ人の本質部分、優秀点を探ろうとしたのではなかったか。

以上、ヴァン・ダイク『アメリカの精神』について述べたが、蘇峰がアメリカの良き面を読み取った作家として第二にあげたいのは、思想家ラルフ・W・エマソンである。当該期の蘇峰は、明治維新前後に比べて大正の青年が志を失い、心に迷いを生じ、不平を口にする一方で快活に行動しないと嘆いていた。それは個々の青年が不幸であるばかりでなく、国家の弱体化を招くものであり、生存競争の世界にあつて危険な兆候であると彼は憂慮した。⁽¹²⁷⁾そこで蘇峰は、青年が意志の力を取り戻す必要性を以下のように力説した。不平、煩悶に取り付かれた青年は臆病、怠惰で、意志が豆腐のようになった徒輩にすぎない。エマソンは「不平は自信力の欠乏より来り、不満は意志の病的より生ず」と言つたではないか。青年には「意育」、すなわち意志を教育すること、自己の意志を鍛錬して鞏固にすることが必要である。そのためにまずなすべきことは「自個に信頼することだ。『自信力』あつての社会心、『自恃心』あつての協力心であつて、自己を恃む気持がないまま他人との協力を求めるとすれば、それは相手に頼り切つた『乞食』と同じである」といふ。⁽¹²⁸⁾

ここで蘇峰はエマソンの言葉「不平は自信力の欠乏より来り、不満は意志の病的より生ず」を引用している。これはエマソンの随筆「自己信頼」(“Self-Reliance”)に記された一節であり、原文は“Discontent is the want of self-reliance; it is infirmity of will.”(不満は自己信頼が欠けていることであり、意志が弱いということだ)というものである。⁽¹²⁹⁾蘇峰はエマソンの自己信頼(自信)の精神、すなわち自己の内面から湧き出づるものを信じ、右顧左眄せず自信をもつてそれに従ふことによって青年が意志を強め、まっすぐな人生を歩むよう望んだ。ひいてはそれが日本の興隆発展に結びつくと考えたのである。明治二十年代以来、彼はエマソンに共鳴し、敬意を抱き

続けてきたが、それは第一次排日土地法の衝撃を受けても変わらず、揺るぎないままであったことがわかる。

蘇峰がアメリカの良き面を読み取った作家として第三にあげたいのは、詩人ウォルト・ホイットマンである。もともとヘンリー・W・ロングフェロー (Henry Wadsworth Longfellow) の詩を愛した蘇峰は、大正二年四月頃、ホイットマンの詩集『自転する地球』(*The Rolling Earth*) にも目を通していた。同書中に収められた詩で、彼がとりわけ関心を寄せ、ラインを書き入れたのは「大道の歌」(*Song of the Open Road*) である。それは全部で十五章から成る長詩であった。⁽²⁵⁾ その冒頭(第一章第一節)は次のように始まる(傍線は蘇峰の書き込んだアンダーラインを再現したもの、以下同様)⁽²⁶⁾。

徒歩で心も軽くぼくは大道に出る、

健康で、自由で、ぼくの前には世界があり、

ぼくの前には好きなところへ連れ出してくれる長い褐色の道がある。

今からはもうぼくは幸運を求めまい、ぼく自身が幸運そのもの、

今からはもうぼくは二度とめそめすまい、二度とぐずぐずまい、不平も言うまい、

家の中の繰言や、書物談義や、口うるさい批評にはきれいさっぱりおさらばして、

力強く、満ち足りて、ぼくは大道を進む。

右の「大道の歌」冒頭個所を、蘇峰は「公道歌」として次のように訳出し、読者に紹介した。⁽²⁷⁾

快歩、爽心、予は開闊なる公道に踏み出だせり。

体胖に、心広く、世界の万象は、予の前に展開せり。

褐色の大道は、綿々として遠く連り、予が脚の向ふ所に任せんとす。

嗚呼今よりして後、予は復た幸運を羨まじ。蓋し此の吾身こそ、幸運其物なれば也。

嗚呼今よりして後、予は復た女、敷泣くまじ。何をか遲疑し、何をか慾望せむや。

室内の愁訴、無用の図書、諸般の不平がましき批評、予に於て何かあらむ。

健脚、安意、予は欣然として、此の開闢なる公道を行旅せむ。

室内における煩悶、不平不満、小賢しい議論や批判とは縁を切り、健全かつ自由な戸外に出て勇ましく人生を踏み出そうという希望にあふれたホイットマンらしい歌である。蘇峰は青年期からロングフェローやエマソンの文章を好み、そこに表れたアメリカ的な雄々しく前向きな人生態度を愛したが、それと同じようにホイットマンの姿勢にも強い共鳴を感じたのであろう。その訳文から明らかのように、彼はホイットマンの詩をよくとらえ、しかもそれを格調高い文語体で翻訳、表現しており、彼が英語力、漢文力とともに深い詩心を持ち合わせていたことがうかがえよう。

また蘇峰が「今からはもうぼくは幸運を求めまい、ぼく自身が幸運そのもの」（蘇峰訳では「嗚呼今よりして後、予は復た幸運を羨まじ。蓋し此の吾身こそ、幸運其物なれば也」）の一節にアンダーラインを引いていることにも着目したい。ホイットマンのいう自分自身が幸運そのものとは一体どういう意味であろうか。ホイットマンは、幸運を自分の外に求めて常に不足感に駆られるのは誤りであり、それではいつまで経っても欲求不満の連鎖から逃れられない。そうではなく自分の内に幸運はすでに存在していることを悟り、そこに充足感を得てこそ、不満は消え、わが身と幸運の一体化した真の幸福が生じるのであり、そうした状態で人生を歩んでこそ、はじめてさらなる幸福に恵まれるのだと言いたいのであろう。蘇峰はこの個所に印象づけられたが、ホイットマンの示唆する「自己の内にある幸福を知る」ということは、先のエマソンのいう「自己の内から湧き出ずるものを信じる」とと相通じるものがある。どちらも自己の内面を見つめ、他人や外部ではなく自分自身に信を置き、その上で人生の大道を踏み出すという点で共通しており、ホイットマンの考えも一種の自己信頼の精神をベースにしていた

といえよう。前述のようにホイットマン「大道の歌」(蘇峰訳では「公道歌」)の冒頭部分を自ら訳出して読者に示した蘇峰は、青年に対して次のように呼びかける。⁽¹²⁸⁾

知らず我が大正の青年諸君は、「この詩を見て」如何の看を做す乎。吾人は諸君が先づ自個を信じて、而して後他人を信じ、自力に依頼して、而して後他力に依頼せんことを望む。吾人は世界に独住せざる限りは、他と一切の交渉を杜絶するを以て、不可能と認む。されど自個ありて後の他人也。未だ自個に信頼する能はずして、能く自から立つものあらざる也。乃ち自個を捨てて他に殉する、献身的精神の如きも、畢竟は自個ありて後の事也。若し自個なくんば、何を以て他に尽さんや。

まずは自分を信じること、その上で他者を信頼し、己れ以外のものに献身するのであり、自己信頼、自信こそがすべての出発点なのだというのである。このように蘇峰はホイットマンの詩を用いて大正青年の奮起を促した。エマソンに続いてホイットマンにおいても蘇峰は自己信頼のスピリットを見出し、それに共感と愛敬の念を抱いたのである。その他にも蘇峰は「大道の歌」の次のような個所にもラインを引いて注目している。⁽¹²⁹⁾

ぼくは思う英雄的な行為というものはすべて戸外の大気のなかで思いつかれ、自由な詩もすべてそうだと、

ぼくは思うぼく自身でも今ここに立ちどまればあまたの奇蹟を行なうことができるだろう、

ぼくは思うこの道の途上で出逢うものなら何であろうとぼくはきつと好きになり、ぼくの姿に目をとめる者は誰でも
ろうときつとぼくが好きになり、

ぼくは思うぼくが会う人は誰であろうときつと幸福になるにちがいないと。

同様に次の部分も蘇峰の目に止まっている。

もしもいま千人の完全な男たちがたとい姿を現わしてもぼくは少しも驚かない、
もしもいま千人の美しい女たちがたとい姿を現わしてもぼくは少しも仰天しない。

今こそばくには最上等の人間を作り上げる秘訣が分った、戸外で育ち大地とともに食べたり眠ったりすることがそれだ。

ここにこそ偉大な個性的行為の生じる場所がある、

(このような行為は全人類の心をとらえ、

それが力と意志とを流露させれば世間の法は押し流され反対するすべての権威とすべての議論はあわれ何の役にも立たぬ)⁽¹³⁹⁾

右のように蘇峰は、英雄的行為は戸外の大気の中で生まれ、最上等の人間を作る秘訣は戸外で生活することだとする個所に着目する。いずれも屋外、自然に身を置き、その中で何物かを見つけ、創り出そうという野生的で雄々しい人生態度に溢れている。かつて日露戦争中の蘇峰は、狩猟を趣味とし、ラフライダーズ(荒馬義勇騎兵隊)を率いて米西戦争に参加したことのあるシオドア・ローズヴェルト(Theodore Roosevelt)大統領の英姿、質実剛健性を褒め称えたが、そうした野生的英雄を愛する彼はホイットマン「大道の歌」にも同様の趣を見出し、それに強く共感したのである。⁽¹³¹⁾

以上、ヴァン・ダイク、エマソン、ホイットマンを通じて蘇峰が感じ取ったアメリカを検証したが、これらを総合した形で彼は以下のようなコメントを残している(文体は鍵カッコ内を除き現代風に改めた)。

自分は米国崇拜者ではないが、驚異、嘆賞するのは「米人氣質」である。今日においてもベンジャミン・フランクリン(Benjamin Franklin)がいう「自由の住する所、是れ吾が郷なる」[“Where liberty is, there is my country,” or “Where liberty dwells, there is my country.”]と云うのは、日本移民に対する扱いは別として、米国ではなお幾分事実である。ドイツでは国家の手が四方に行き届き、英国では社会的制裁が各階級を貫くが、米国では個人が活動する

上で何等の支障もない。その中で発生した米人氣質は勢い「快活、有為、不羈、自恃」となる。「頂天立地、不羈独立の男兒」は米人において最も見ることができると言える。

米人はいわゆる野人である。彼らの特色はその野趣にあり、それが米国を偉大ならしめた。エイブラハム・リンカン (Abraham Lincoln) は「野人の聖」、シオドア・ローズヴェルトは「野人の雄」に近いものだ。ウィルソンは大統領として余りに学者肌であるが、米人が彼を選んだのは、共和党に食傷して民主党に傾いたからにすぎない。米人の本色を問えば、自然の巨童、野生の怪児、ローズヴェルトにあるや断じて疑い得ない。

もとより米国は混合国である。その氣質も東西南北、人種によって異なる。東部には英国流の昔氣質が厳存し、南部には鷹揚な殿様氣質が残る。特に米国ではアイルランド人、ドイツ人が有力であり、国内に国がある状態といえないこともない。しかしそうした混合国であるのに、いわゆる米人氣質なるものは全米に行き渡っている。社会が自由で、そこに活動する人物がまた自由、不羈であることはその隋一の特色である。¹³²⁾

自分は「米人氣質」を驚異、嘆賞すると蘇峰はいう。米人氣質とは何か。個人が自由である社会の中から生じる「快活、有為、不羈、自恃」の気性である。そこから「頂天立地、不羈独立の男兒」、ローズヴェルトのような良い意味での「野人」が生まれる。アメリカは多様な国であるが、この米人氣質は全米に行き渡り、人々が自由、不羈であるということが同国第一の特徴だといえるのである。このように自由、自恃（自己信頼）の心に富み、野生的で活力にあふれた国アメリカというイメージは、蘇峰が青年期から抱いてきたものと変わりなく、それは第一次排日土地法の衝撃を受けても変容することなく彼の心に焼き付いていたことがわかる。

このようにアメリカの良き面を知る蘇峰は、他の日本人がそうした部分を見ずに、とするとアメリカの悪しき風潮の方にかぶれがちな点を憂えていた。彼によると、米国流儀を追う者は米人の「活潑々地の精神」¹³³⁾、何事も世界一を目指す「努力と自信」、日々新たに止まることのない「勇往敢爲の氣象」を学ばず、彼らの「浅率、輕易、俗悪」と「黄金万能」をもって「擬米人」たろうとする者がいる。それは先生の朝寝、酔狂のみを学

ぶ悪弟子の類であろうというのである。⁽¹³⁴⁾ここで見るように蘇峰は、アメリカ人に軽薄で拝金的な一面があるとの認識をもっていたが、そうした欠点を模倣するのではなく、長所にこそ学ぶべきであると考えた。

さらに蘇峰は、かつてのアメリカ旅行（明治三十年）を思い出しながら、同国の優れた点を以下のように紹介していく（文体は鍵カッコ内を除き現代風に改めた）。⁽¹³⁵⁾

米人は他人からの指図を求めず、「自力の統制」をまっとうする。例えば切符売場で山をなす群衆も、いつの間にか縦列となり、順序よく用を済ませる。「自制の精神」をもつ米人は無規則の中に規則を定め、無秩序の中に秩序を保つ。この気風は集会、電車中、旅館、公園など至る所に見出されるが、それは歴史的産物であって、一朝一夕に生まれたものではない。「若し米人の素養なくして、米人の真似を倣さん乎。吾人は社会の必らず乱脈に陥るを、断言するに憚らざる也。」

米國政治は決して理想的なものではなく、連邦政府はさておき、州、都市の政治がややもすると腐敗の巢窟となるのは事実である。しかしそのために「米國の清健なる、國民的活力」が衰えないのは、「良好なる市民の統制力、結合力」があるからだ。いかに腐敗漢が都市の政治を私しても、都市の勢力は巍然として他に存在する。

米國について誤った見方がある。それは「米國が世界市民の、寄合世帯にして、云はゞ一種の混合國なれば。いざと云ふ場合にても、國民的一致は六ヶ敷からんとの、謬見是れ也。」なるほど米國の中には、小ドイツ國、小アイルランド國、小イタリア國などがあり、人種、國籍以外にも、農民國、商工國、貧乏國、金持國がある。しかし「如何なる内部の差別は存するも、彼等は米國人民として、共通の國民的精神を有する也。」

つまり米國を國家的に大觀すれば、ドイツ人、アイルランド人もなく、種類、階級もなく、ただ一つの合衆國民があるだけだ。彼らの「自から組織し、自から統制する能力と、傾向」は國家的要件にも応用できる。「米人は他人よりして、愛國心を彊ひられず。されど彼等は自國の爲めに、貢獻す可き義務を、自ら閑却せざる也。」

人は、私が余りにも米人を買い被っているとするかもしれない。しかし、もし「一億の米人が、一億の心を有し。彼

等が一旦緩急に際して、国家の為に努力せずと、見縊るが如きあらん乎。吾人は其の禍の踵を回らさずして、我に来るを予期せずんばあらず。」

右の蘇峰の意見は二つの点で興味深い。第一にアメリカ人が自由な社会にあつて自律の精神を失わないという長所を洞察するとともに、自己統制力の伝統がない人々がアメリカ人を表面的に模倣すれば、その社会は乱れるであろうと予告していることである。アメリカの自由、民主主義や金銭志向を日本人が盲目的に取り入れるならば、放縦、利己主義や拝金主義につながるであろう。当時の蘇峰は、アメリカの個人主義、デモクラシー、物質主義を日本人が無批判に受け入れ、日本魂、忠君愛国の精神を失いつつあるという不安にかられていた。加えて昭和の敗戦後、アメリカの占領下にあつて彼は同様の危機感をさらに強い形で示し、日本人が自由を放縦、民主主義を利己主義と履き違え、社会の秩序と規律が乱れた点を深く憂えている。大正デモクラシー期、ならびに戦後民主主義の時代における蘇峰は、アメリカに学ぶべき点を見出す一方で、皮相なアメリカ模倣を拒否する点で一貫していたのである。

第二に興味深いのは、アメリカ人に共通の国民精神、自発的な愛国心があることを見抜き、彼らが一億ばらばらの心を持ち、いざというとき国家のために尽くさないと侮るならば、我に災いが来るであろうと予告していることである。後年の日米戦争期、蘇峰はそれと正反対の発言を繰り返している。すなわち黄金・物質万能、享楽主義の蔓延したアメリカ人には闘志が乏しく、世界の人種を寄せ集めた一億五千万人の米国民は一億五千万の心を持ち、「彼等は寄せ木細工のやうなもので少し雨でも降ればすぐこはれてしまふ」、そうした国民に最高の愛国心を求めるのは全く不可能であると述べている。⁽³⁶⁾ アメリカ人の自発的な組織統制力と国家への献身を力説していた蘇峰が、なぜ逆のことを主張するようになったのか。戦争中、八十歳前後という高齢にあつたとはいえ、記憶

力に優れる彼が、かつての知識一切を失ってしまったとは考え難い。実際、戦時中においても蘇峰は、英米人も彼ら相應に英米精神、英米魂があると述べており、これは第一次大戦期の意見と通じるものがある。⁽¹³⁷⁾

発言変化の理由として推察されるのは、まず日米戦争時の蘇峰が日本人の団結力と愛国心をアピールし、それと対比してアメリカ側のマイナス面を強調、誇張することによって、国民（及び自分自身）に自信を与えようとしたのではないかとことである。日本人、アメリカ人を問わず、生死をかけた戦いに直面した者は、事実を探究するよりも、生き残るために勝つことを優先するであろう。とくに学者でなく国民の精神的指導者を自認する蘇峰は、国民を勝利に向かわせるためには、たとえ前言を翻すことになっても、そこに抵抗を感じることが少なかったのではないかと考えられる。また戦いの渦中にある者は、平時と異なる緊張と興奮した心理状態の中にある。蘇峰も心の奥ではアメリカ人の自律性、国家奉仕の心を知りつつも、それをあえて脇に追いや、あるいはそれを認めたくないという心境にあり、前言を覆すような発言をしたのではないか。

次に考えられることは、大正期の蘇峰はたとえアメリカの長所を知りつつも、その知識を十分自己の血肉としていなかったのではないかとことである。先に触れたように彼は旅行者として約一か月、アメリカを回ったものの、生活者、留学生として同国に長期滞在をした経験はない。そのためアメリカ情報の多くは、文字や他者を通じて得たものになりがちであった。本章で見た蘇峰のアメリカ理解は、当時としては相当の広さと深さを備えたものであったと考えられるが、その知識は自己の直接体験から苦しみ抜いて導き出したものではなかった。そこに脆弱さが潜んでいたからこそ、かつての主張がその正反対のものに取って替えられる結果となったのではないかと考えられる。ただし敗戦という強烈な経験をふまえた蘇峰は、戦時中自分がアメリカを過小評価したことを認め、アメリカ人の愛国心を大正期以上に高く評価するようになって⁽¹³⁸⁾いる。

以上、ヴァン・ダイク、エマソン、ホイットマンが蘇峰に与えた影響と、彼のポジティブなアメリカ評価につ

いて検討した。第一大戦期の蘇峰は、アメリカのマイナス面だけでなく、プラス面をも見ようとした。そこには青年期からのアメリカへの敬意が失われることなく息づいていた。同時に日本魂を復活、強化するため、ライバルとしてのアメリカに対抗するため、同国の強さの秘密をさぐり、それを自国の参考にするという姿勢も透けて見える。蘇峰はアメリカを動かしている根底部分の米国魂（アメリカン・スピリット）を見極めようとした。それはアメリカが日本の脅威と感じられるがゆえに、彼にとっては切実な問題であったといえる。¹³⁹

おわりに

本稿では第一次大戦期における蘇峰のアメリカ観を検証した。結論として以下が指摘できる。

第一に、大戦期の蘇峰はアメリカの日本移民排斥運動、急速な経済発展と満洲、中国大陆への経済進出の気配、海軍力の増強（とくにダニエルズ建艦計画）に強い脅威を感じ、事態が改善されない限り、日本とアメリカは衝突し、人種戦争を引き起こすであろうと考えた。アメリカの対日渡洋作戦を予期する彼は、日米の軍事力均衡、太平洋のバランスを達成することによって戦争を回避すべきであると考えた。

第二に、しかし辛亥革命後の米中接近は、日本の生存がかかった日中経済関係にアメリカが「横槍」を入れるのではないかと蘇峰の不安をかきたてた。そこで彼はアメリカに対抗するためアジア・モンロー主義を提唱し、アジアはアジア人（とくにアジアの盟主としての日本）が自治すべきであるとしてアメリカを牽制した。さらに日中経済同盟、攻守同盟を提案して、アジア・モンロー主義をより具体的に提案しようと試みた。

第三に、右のようにアメリカに強い抵抗を覚える蘇峰は、その一方でアメリカ人の長所である「米国魂」「自恃の精神」を敬愛し、日本人はそこから学ぶべきであると考えた。アメリカに嫌悪感を抱きながらも、同国への

尊敬心を失わず、その良き面を日本に取り込んで生存競争に打ち勝つ国にしようという姿勢を合わせていたわけである。

大戦後の蘇峰はそれまでと同様に、①移民、②経済、③軍事をめぐるアメリカから圧力を加えられるというイメージを強めていく。大正十三年（一九二四）、排日移民法の成立はそうした被圧迫感、屈辱感にさいなまれる彼に、更なる衝撃をもたらすことになる。⁽¹⁰⁾

(1) 蘇峰の経歴については、和田守編「年譜」『明治文学全集 34 徳富蘇峰集』筑摩書房、昭和四十九年所収を参照した。以下同様。

(2) 同右。徳富猪一郎『蘇峰自伝』中央公論社、昭和十年十一月第五〇版、四六二―四六三、四六五―四六六頁。近世日本国民史については、杉原志啓『蘇峰と『近世日本国民史』——大記者の「修史事業」』都市出版、一九九五年を参照のこと。

(3) 大正二年十二月二十八日、三年一月二十七日、七年二月十八日付・徳富蘇峰宛山県有朋書簡、酒田正敏、坂野潤治他編、近代日本史料選書七―二『徳富蘇峰関係文書』山川出版社、一九八五年、三八八―三九〇、三九四、三九六頁。

(4) 大正五年三月二十四日付・徳富猪一郎宛原敬書簡、財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団・徳富蘇峰記念館所蔵。以下、二宮蘇峰記念館と略す。

(5) 大正六年五月十三日付・徳富蘇峰宛近衛文麿書簡、二宮蘇峰記念館所蔵。

(6) その他に民間での蘇峰評として、『中央公論』大正五年五月号（三一年五号）、七七―九〇頁に掲載された「文壇に復活せる徳富蘇峰論」（松井柏軒「文壇に於ける蘇峯君」、石川半山「蘇峯先生の近情」、川尻東馬「無二の現代政治史論家」、田川大吉郎「蘇峯先生の文章」、若宮卯之助「論各としての徳富蘇峰」）がある。また単行本として、水府楼学人（久木東海男）『無冠之帝王』敬文館、大正二年十二月、山川均（壳文社編集局代表）編『徳富蘇峰美辞名句集』京橋堂、大正六年三月所収「はしがき」などがある。

- (7) 門外漢「東京たより」『国民新聞』大正三年八月十八日。門外漢は蘇峰のペンネーム。
- (8) 門外漢「東京たより」『国民新聞』大正三年八月二十五日。
- (9) 『国民新聞』大正三年十一月八日。無題、無署名であるが、社説と考えられる。文体、内容からいつて蘇峰によるものと考えられる。
- (10) 拙著『近代日本人のアメリカ観 日露戦争以後を中心に』慶應義塾大学出版会、一九九九年、六五—六八頁。
- (11) 蘇峰にとってまとまった中国視察旅行は二回目であった。一回目は明治三十九年（一九〇六）五月から八月にかけて行われており、その紀行は『七十八日遊記』民友社、明治三十九年十一月（増補版明治四十四年十二月）としてまとめられている。『七十八日遊記』増補版の存在は、安藤英男『蘇峰 徳富猪一郎』近藤出版社、昭和五十九年、四七八頁より知ることができた。なお第一回目の旅行については、藪田謙一郎「徳富蘇峰の見た清末中国」『曙光』第一二号、平成十三年十一月を参照のこと。
- (12) この時期をカバーしている代表的研究として、早川喜代次『徳富蘇峰』徳富蘇峰伝記編纂会、昭和五十四年第二版、John D. Pierson, *Tokutomi Soho, 1863-1957: A Journalist for Modern Japan* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1980; 安藤『蘇峰 徳富猪一郎』昭和五十九年、高野静子『蘇峰とその時代—よせられた書簡から』中央公論社、昭和六十三年、和田守『近代日本と徳富蘇峰』御茶の水書房、一九九〇年、藤井賢三『昔男ありけり—徳富蘇峰筆戦一代記—』自費出版、平成三年、有山輝雄『徳富蘇峰と国民新聞』吉川弘文館、平成四年、ビン・シン著、杉原志啓訳『評伝 徳富蘇峰—近代日本の光と影—』岩波書店、一九九四年、杉原『蘇峰と『近世日本国民史』』一九九五年、高野静子『続 蘇峰とその時代—小伝 鬼才の書誌学者 島田翰 他』徳富蘇峰記念館、平成十年、米原謙『徳富蘇峰—日本ナショナリズムの軌跡—』中央公論新社（中公新書）、二〇〇三年、梅津順一「徳富蘇峰と帝国日本の魂—『大正の青年』の使命をめぐる—」『聖学院大学論叢』一九卷二号、二〇〇七年三月などがあるが、当該期の蘇峰とアメリカについては十分言及されているわけではない。なお本稿で取り上げる蘇峰の『アジア・モンロー主義に関する研究、考察として、神谷昌史』『東西文明調和論』の三つの型—大隈重信・徳富蘇峰・浮田和民—『大東法政論集』二〇〇一年三月、李京錫「徳富蘇峰の亜細亜モンロー主義—大乗的使命と小乗的使命の関係—」『早稲田政治公法研究』第七三号、二〇〇三年八月、米原謙『日本政治思想』ミネルヴァ書房、二〇〇七年、

一六九—一七二頁、蘇峰の中国観について、杉原志啓「徳富蘇峰—『支那』観にみる『発想の根源』」岡本幸治編『近代日本のアジア観』ミネルヴァ書房、一九九八年所収、藪田謙一郎「徳富蘇峰の中国認識」西田毅、和田守、山田博光、北野昭彦編『民友社とその時代—思想・文学・ジャーナリズム集団の軌跡—』ミネルヴァ書房、二〇〇三年所収、板倉弘明「徳富蘇峰の中国観」に関する研究史の「考察」『城西国際大学日本研究センター紀要』第二号、二〇〇八年一月などがあるが、本稿は蘇峰のアジア・モンロー主義、中国観の裏側に彼のアメリカからの脅威感、米中接近への不安感が存在し、両者が絡み合っていたことを明らかにすることに力点を置いている。

(13) 門外漢「東京たより」『国民新聞』大正四年一月五日。

(14) 蘇峰生「日本より見たる世界の変局（八十七）」『国民新聞』大正三年十二月二十六日、門外漢「東京たより」『国民新聞』大正四年一月五日。

(15) 蘇峰生「大正の青年と帝国の前途（百二十四）」『国民新聞』大正五年八月二十日。

(16) 若槻泰雄『排日の歴史 アメリカにおける日本人移民』中央公論社（中公新書）、昭和六十年第五版、一五六—一五八頁。

(17) Roger Daniels, *The Politics of Prejudice: The Anti-Japanese Movement in California and the Struggle for Japanese Exclusion* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1962), 74.

(18) 秦郁彦『太平洋国際関係史—日米および日露危機の系譜一九〇〇—一九三五—』福村出版、一九七二年、六八、八九—九一、一〇九頁。

(19) 門外漢「東京たより」『国民新聞』大正四年二月二十六日。

(20) Sandra C. Taylor, *Advocate of Understanding: Sidney Gulick and the Search for Peace with Japan* (Kent, Ohio: Kent State University Press, 1984).

(21) Ibid., 64, 87, 96, 81, 116–117, 129, 131–132.

(22) 財団法人石川文化事業財団・お茶の水図書館成實堂文庫所蔵の蘇峰旧蔵書、Sidney L. Gulick, *The American Japanese Problem: A Study of the Racial Relations of the East and the West* (New York: Charles Scribner's Sons, 1914). 同書の見開きには丸善のステッカーが貼られ、蘇峰が同書店を通じて購入したことがわかるが、彼の蔵書に

はその他に「Sidney L. Gulick, *American Democracy and Asiatic Citizenship* (New York: Charles Scribner's Sons, 1918) があり、これには著者謹呈本のカードが挿入され、蘇峰、ギューリック間に関係があったことがうかがえる。

(23) Gulick, *The American Japanese Problem*, 8-9. アンダーラインは赤鉛筆で記されている。その他に同じく赤鉛筆による右サイドラインも記されている。

(24) Ibid., 11, 13. どちらの頁も該当個所の右余白に赤鉛筆によるサイドライン。

(25) Ibid., 189. 赤鉛筆によるアンダーライン。ただし当時のほとんどのアメリカ人と同様に、著者のギューリック自身も、北東ヨーロッパ人がより望ましい市民であるという人種主義者の仮定を共有していた。Taylor, *Advocate of Understanding*, 83.

(26) Gulick, *The American Japanese Problem*, 22. 赤鉛筆によるアンダーライン。その他に右余白に赤鉛筆によるサイドライン。

(27) Ibid., 34. 赤鉛筆によるアンダーライン。

(28) お茶の水図書館成實堂文庫所蔵の蘇峰旧蔵書「Sidney L. Gulick, *The New Anti-Japanese Agitation* (New York: Commission on Relations with the Orient Federal Council of Churches of Christ in America), [1920?]」文中に記された年号やデータから判断して一九二〇年頃の発行と推測される。

(29) Taylor, *Advocate of Understanding*, 137-138. さらに陸軍情報部 (Military Intelligence) もギューリックや在米ジャーナリストの川上清 (Kiyoshi Karl Kawakami) は疑わしいとしていた。しかし、ギューリックが日本から金銭的報酬を受けたエージェントでなかったことは明白であると同書は結論づけている。Ibid., 139, 146.

(30) 蘇峰生「大正の青年と帝国の前途 (百二十二)」『国民新聞』大正五年八月十八日、門外漢「東京たより」『国民新聞』大正四年二月十三日。

(31) 徳富猪一郎『支那漫遊記』民友社、大正七年六月、二四七頁。

(32) 岡田泰男『アメリカ経済史』慶應義塾大学出版会、二〇〇〇年、五頁。西川純子「資本輸出と海外進出」岡田泰男、永田啓恭編『概説アメリカ経済史 植民地時代から現代まで』有斐閣、一九九〇年初版第九刷所収、二〇三―二

○五頁。ポール・ケネディ著、鈴木主税訳『大国の興亡』一五〇〇年から二〇〇〇年までの経済の変遷と軍事闘争』上巻、草思社、一九八八年、四〇四頁。

(33) 蘇峰生「膠州湾問題のみならず」『国民新聞』大正三年九月六日。

(34) 蘇峰生「大正の青年と帝国の前途（百七）」『国民新聞』大正五年八月一日、蘇峰生「観瀾亭雜俎（三）」『国民新聞』大正六年七月十九日。

(35) 蘇峰生「日本より見たる世界の変局（八十八）」『国民新聞』大正三年十二月二十七日、蘇峰生「大正政局概観（百）」『国民新聞』大正五年二月二十九日、蘇峰生「大正の青年と帝国の前途（百二十四）」『国民新聞』大正五年八月二十日。

(36) 門外漢「東京たより」『国民新聞』大正四年五月六日。二十一カ条要求に対するウィルソン大統領、米政府の対応については、高原秀介『ウィルソン外交と日本 理想と現実の間 一九一三—一九二二』創文社、二〇〇六年。

(37) 門外漢「東京たより」『国民新聞』大正四年四月十七日。

(38) Eleanor Tupper and George E. McReynolds, *Japan in American Public Opinion* (New York: The Macmillan Co., 1937), 112-118. エリノア・タッパー、G・E・マックレイノールズ共著、辻重四郎編訳『アメリカの対日輿論』大雅堂、一九四六年、六三—六八頁。

(39) 蘇峰はフランス人ジョルジュ・ブルドンによる観察記『ドイツの謎』を大正四年四月に読了したが、お茶の水図書館成實堂文庫所蔵の蘇峰旧蔵書を見ると、その中に「黄禍米禍」の書き込みがある。Georges Boudon, *The German Enigma: Being an Inquiry Among Germans as to What They Think, What They Want, What They can do* (London and Toronto: J. M. Dent & Son, 1914), 43. 当時の彼は「アメリカを日本に災いをもたらす「米禍」と認識するようになっていた。

(40) 蘇峰生「日本より見たる世界の変局（八十三）」『国民新聞』大正三年十二月二十二日。

(41) George W. Baer, *One Hundred Years of Sea Power: The U.S. Navy, 1890-1990* (Stanford, California: Stanford University Press, 1994), 59-60. 他方、アメリカを仮想敵国とする日本では、戦艦八隻、巡洋戦艦八隻を基幹とする八・八艦隊の整備を計画し、第二次大隈重信内閣は大正六年七月に議会の承認を得て、当座の措置として八・

四艦隊案に着手することになる。その後、大正七年に八・六艦隊案、同九年に八・八艦隊案が議会の予算承認を得てスタートしたが、建艦費の負担に悩む日米両国がともに大正十一年、ワシントン海軍軍縮条約によって軍備制限に至ったことは周知の通りである。

(42) 蘇峰生「大正の青年と帝国の前途 (百二十三)」『国民新聞』大正五年八月十九日。

(43) William Reynolds Braisted, *The United States Navy in the Pacific, 1902-1922* (Austin and London: University of Texas Press, 1971), 142; Edward S. Miller, *War Plan Orange: The U.S. Strategy to Defeat Japan, 1897-1945* (Annapolis, Maryland: Naval Institute Press, 1991), 33-35, 96.

(44) Braisted, *The United States Navy in the Pacific*, 142.

(45) 蘇峰生「大正の青年と帝国の前途 (百二十三)」『国民新聞』大正五年八月十九日。

(46) 蘇峰生「大正の青年と帝国の前途 (百二十二)」『国民新聞』大正五年八月十八日。

(47) 蘇峰生「大正の青年と帝国の前途 (百二十三)」『国民新聞』大正五年八月十九日。

(48) 蘇峰生「大正の青年と帝国の前途 (百二十四)」『国民新聞』大正五年八月二十日。

(49) ちなみにこの前年の大正四年の時点で蘇峰は、仮に「日米衝突」が起きた場合、英国はどちらを援助するかという問題を論じている。蘇峰生「日本より見たる世界の変局 (百二十一)」『国民新聞』大正四年二月十日。第三次日英同盟協約 (明治四十四年・一九一一年締結) 第四条によりイギリスは事実上、アメリカとの交戦義務を負わないことになったため、「日米の葛藤」にあたつて日英同盟には期待できないというのがその結論であった。

(50) 拙著『近代日本人のアメリカ観』五四—五九頁。

(51) 蘇峰生「大正の青年と帝国の前途 (百二十三)」『国民新聞』大正五年八月十九日、蘇峰生「日本より見たる世界の変局 (八十四)」『国民新聞』大正三年十二月二十三日。

(52) 蘇峰生「日本より見たる世界の変局 (八十四)」『国民新聞』大正三年十二月二十三日。

(53) 蘇峰生「大正の青年と帝国の前途 (百二十四)」『国民新聞』大正五年八月二十日。

(54) 蘇峰生「日本より見たる世界の変局 (十三)」『国民新聞』大正三年九月二十四日、蘇峰生「日本より見たる世界の変局 (百十九)」『国民新聞』大正四年二月七日。梅津順一氏もそうした蘇峰の発言から「ここには確かに、太平洋

戦争に至る日米対立の道筋が見通されている」と述べている。梅津「徳富蘇峰と帝国日本の魂」一五八頁。

(55) ちなみにこうした見方をとる彼は、当時日米両国で流行した日米戦争論の影響を受けていたのだろうか。第一次排日土地法が成立した大正二年を一つの頂点として、戦争の風説(ウォー・スケア)が流れたことは、秦「太平洋国際関係史」第四章「一九一〇年代の日米危機」が明らかにしている。実際、蘇峰が目を通していた出版物においても日米戦争を想定した意見が現われており、その一例として『アウトルック』誌は、あるドイツ人の意見として次のような言葉を紹介している。「もし米日戦争になればドイツは日本に好意的中立をとるだろう。そうすることで日本がアメリカを叩くのは一層容易になる。」蘇峰は日米戦争に言及したこの個所に着目し、アンダーラインを引いている。
 “An Invitation to Seidion,” *The Outlook*, Vol. 112, No. 17, 26 April 1916, 935. ただし蘇峰がウォー・スケアに影響されたとは言い難い。彼は後述するように、ドイツが謀略によって日本とアメリカの関係を割こうとしていると警戒し、そのため上記のようなドイツ人の日米戦争論に注意を向けたのであり、アメリカ人による扇情的、ゴシップ的な日米未来戦論を盲目的に信じ、あるいはそれに乗じるようなことはなかった。先に述べたように黄禍論者ホブソンの排日論には不信の目を向けており、また、お茶の水図書館成實堂文庫の蘇峰旧蔵書には、フレデリック・マコーミック『日本の脅威』(Frederick McCormick, *The Menace of Japan*, Boston: Little, Brown, and Co., 1917) ジェームズ・F・アボット『日本の膨脹とアメリカの政策』(James Francis Abbott, *Japanese Expansion and American Policies*, New York: The Macmillan Co., 1916) のような日米戦争に言及した書物があるが、読んだ形跡はなく、彼がこうした書物を取りあえず購入したもの、実際に読み進める価値を認めなかったことがうかがえる。またギュリックによる『反日ウォー・スケア物語』(Sidney L. Guick, *Anti-Japanese War-scare Stories* (New York: Fleming H. Revell Co., 1917) は排日黄禍論の実例を詳しく紹介した書であるが、これについても読んだ形跡は見当たらず、基本的にこの時期の蘇峰には際物的な日米戦争論を正面から取り上げようという気持がなかったことがわかる。

(56) かつてヴィルヘルム二世 (Wilhelm II) の黄禍論と三国干渉に悩まされた蘇峰のドイツに対する警戒心は強く、開戦当初より彼は、敵国ドイツが謀略を用いて日米離間を図るかもしれない、しかし日米葛藤は両国にとって「此上なき不幸」であって、自分は日米の識者が相呼応してドイツのために陥れられることがないよう望むと述べていた。門外漢「東京たより」『国民新聞』大正三年九月二日。

- (57) 蘇峰生「大正の青年と帝国の前途(百二十二)」『国民新聞』大正五年八月十八日。
- (58) 蘇峰生「大正の青年と帝国の前途」(百二十二、百二十四)『国民新聞』大正五年八月十八日、二十日。
- (59) 蘇峰生「観瀾亭雜俎(十五)」『国民新聞』大正六年七月三十一日。
- (60) Ichiro Tokutomi, *Japanese-American Relations*, trans. Sakeshige Yanagiwara (New York: The Macmillan Co., 1922), ワシントン会議と蘇峰については、拙著『近代日本人のアメリカ観』で考察したが、ロンドン会議と蘇峰については、稿を改めて論じてみたい。
- (61) 門外漢「東京たより」『国民新聞』大正三年一月六日、蘇峰生「日本より見たる世界の変局」(八十二、八十八)『国民新聞』大正三年十二月二十日、二十七日、蘇峰生「大正政局概観(百)」『国民新聞』大正五年二月二十九日、蘇峰生「大正の青年と帝国の前途」(九十九、百、百一、百二、百三、百二十四)『国民新聞』大正五年七月二十二日、二十三日、二十五日、二十六日、二十七日、八月二十日。蘇峰のアジア・モンロー主義の背後に「米国の影」が存在したことは、米原謙氏も着目、指摘している。米原『徳富蘇峰』一九二一一九四頁。なお蘇峰は実際には、本章のタイトルに示したように「亜細亜モンロー主義」の文字を用いているが、本稿ではタイトルを除いて「アジア・モンロー主義」で統一した。また蘇峰を含む当時のアジア・モンロー主義の類型については、浮田和民「新亜細亜主義(東洋モンロー主義の新解釈)」『太陽』大正七年七月号、二四卷九号、二一一七頁。
- (62) ここでいう欧米人の勢力とは、文脈上、条約で認められた権益のことを指すのではないかと考えられる。
- (63) ちなみに後年、昭和の敗戦直後、連合国総司令部参謀第二部(G2: General Staff II)内の報告書は、蘇峰の著作の大半がアジアから白人を追い出すことを日本国民に教え、蘇峰の『国民新聞』は「日本人の黄色人種支配の欲望」を促したとレポートしている。拙稿「敗戦後の徳富蘇峰とアメリカー一九四五―一九五七年―」『法学研究』八〇巻二号、平成十九年二月、五六頁。こうした見方は蘇峰が人種平等と東西融和を強調していたことを閑却している点で再考の余地があると考えられる。
- (64) C. V. Hibbard, "What will Japan do with Kiaochau?", *The Outlook*, Vol.109, No.6, 10 February 1915, 338-341.
- (65) ヒバードは①～⑤に関して大略以下のように記している。①商業発展……後藤〔新平〕総裁は満鉄によって畑地

を世界の市場にリンクさせ、農民は大豆をすばやく売りに出すことが可能となった。②治安向上……満鉄沿線に中国人は平穏と安全を見出し、毎春莫大な数の中国人が山東省から押し寄せ、新しい鉄道町は急速に商業が増大し、それによって商人も農民も栄えた。③鉱山開発……日本人が近代化した撫順鉱山は一日あたり七、〇〇〇トンの優良なボーライ用炭を産出し、中国人労働者数千人の賃金は以前の約二倍となった。④教育向上……日本人と中国人は新たに作られた小学校、鉄道工科学校、奉天の医学校で学んでおり、日本人の優良な道路と衛生的な入植地は現代文明のきわめて貴重な実物教育である。⑤衛生、医療進歩……満洲ではコレラと疫病がいつも存在したが、日本人は要所の鉄道町に病院を作り、大連港では感染の疑いがある船客を隔離し、天然痘は鉄道沿線地帯から排除された。過去十年間、日本の行政が満洲にもたらした多大な利益を前にして、証拠のない疑惑を口にすることは無礼である。このようにヒバードは日本を高く評価した。

(66) 門外漢「東京たより」『国民新聞』大正四年三月五日。

(67) “Japan and China,” *The Outlook*, Vol.110, No.3, 19 May 1915, 121-123.

(68) 「我を諒とす 米国アウトロク誌所論」一・二『国民新聞』大正四年六月十五日、十六日。

(69) 門外漢「東京たより」『国民新聞』大正四年六月十六日。ギョーリックとともにアメリカキリスト教会連盟 (Federation of the Churches of Christ in America) を代表して日本を訪問したシェイラー・ペンニース (Shailer Mathews) 博士と帰国後、ニューヨーク市での晩餐会で、アジア・モンロー主義 (Asiatic Monroe Doctrine) に「こいつは同様の意見を開陳しつつある」。“Americans on Japanese Policy,” *The Outlook*, Vol.110, No.1, 5 May 1915, 4.

(70) “Japanese Aid for the Allies,” *The Outlook*, Vol.109, No.4, 27 January 1915, 160-161; “Japan and International Manners,” Vol.109, No.12, 24 March 1915, 659; “California and the Japanese,” Vol.109, No.5, 3 February 1915, 249; Chancey M. Cady, “Japan, Germany, and the United States: An Interview with the Japanese Ambassador to the United States,” Vol.109, No.6, 10 February 1915, 338; “Japan and China,” Vol.109, No.8, 24 February 1915, 410; “Japan and China,” Vol.109, No.10, 10 March 1915, 553; “Japanese-Chinese Negotiations,” Vol.109, No.15, 14 April 1915, 853-854. 折時『アウトロク』は中国人または中国への同情者から親日的であ

るとの非難を多数受けたが、多くは匿名の手紙で、その数々が感情的なものであったという。そのため「日中両国の友人」を自任するという同誌は、中国の立場を冷静に陳述できる人物として中華民国政府顧問、前コーネル大学政治経済学教授のジェレマイア・W・ジェンクス (Jeremiah Whipple Jenks) に執筆依頼を行い、日本は中国の門戸開放と機会均等の原則を破ってきたとする彼の意見を掲載している。それによると、①日本が韓国経由で中国に入れている商品は関税が三分の一という特惠を享受している、②満洲に輸入される外国商品には日本の輸入業者よりも不利な税金が課せられている、③日本はロシアとの講和条約によって満鉄をめぐる権利を引き継いだ、④アメリカにおける中国人留学生、実業人、外国旅行中の官吏、中国における官吏、言論機関、英米人居留民は、日本人が中国の一定地域を現実的、物理的、政治的に支配しようとしていることを恐れる理由があると心配し、かつ信じている。日本は東洋の問題においてリーダーになろうと熱望しているが、我々や他国の利益を傷つけようとする代わりに、アメリカ合衆国と協同することによってその目的を最もよく達成できるとジェンクスは述べている。Jeremiah W. Jenks, "Japan in China," *The Outlook*, Vol. 110, No. 2, 12 May 1915, 83-85. ただし『アウトLOOK』ではそうした見解は例外的であり、基本的に日本を支持する意見が多数を占めていた。

(71) 拙稿「徳富蘇峰とアメリカ人の交流―書簡を手がかりに―」『尚美学園大学総合政策研究紀要』第三・四合併号、二〇〇二年十一月、七三頁。

(72) Tupper and McReynolds, *Japan in American Public Opinion*, Chapter IV; タッパー、マックレイノールツ共著『アメリカの対日輿論』第四章。

(73) Jefferson Jones, *The Fall of Tsingtau: With a Study of Japan's Ambitions in China* (Boston and New York: Houghton Mifflin Co., 1915), Preface xiii, 71, 80, 83, 86, 105, 107-108. ちなみにジョーンズは、青島攻撃に先立ち神尾中将と加藤定吉海軍中将 (第二艦隊司令長官) が連名で青島総督アルフレート・マイヤー・ヴァルデック (Alfred Wilhelm Moritz Meyer-Waldeck) 海軍大佐に送った無線電信の文面 (一九一四年十月十日付) を同書で引用、紹介している。それは「日本の天皇は青島在留の中立国民ならびに交戦国の非戦闘員を救いたいと考えており、もし閣下がこの提案受諾を望むならば、それに関する詳細なコミュニケーションを我々に与えることが必要である」というものであった (Ibid., 59-60)。これは日本側から提供されたものと考えられ、ジョーンズが日本の攻囲軍司令部から相当の

便宜を得ていたこと、また日本側もそうした情報を与えることによって外国人記者を対外宣伝上、利用しようとしたことがうかがえる。なお日独戦争については、斎藤聖二『日独青島戦争』（秘 大正三年日独戦史 別巻2）ゆまに書房、二〇〇一年が詳しい。

(74) Ibid., 4, 6.

(75) Ibid., 9, 174, 13-14, 174-175.

(76) Ibid., 186-190, 135, 185, 207.

(77) Ibid., 142-144.

(78) Ibid., 40, 123, 140.

(79) 門外漢「東京たより」『国民新聞』大正四年十二月二十二日。

(80) 蘇峰生「觀瀾亭雜俎（二十八）」『国民新聞』大正六年八月十三日。

(81) 多くのアメリカ人は、世界はキリスト教と民主主義の方向にむかっており、またそうあるべきだとし、新たに誕生した中華民国がアメリカと緊密に協力しつつ、キリスト教の理想に導かれて民主主義国になるであろうと考えがちであった。ウィルソン大統領が反日親中で中華民国の代弁者として活動した駐華公使ポール・ラインシュ（Paul Reinsch）から、ラインシュが中華民国の若手外交官でコロンビア大学出身の顧維鈞（Ku Wei-chun, 別名 Vi Kyuin Wellington Koo）から、ロバート・ランシング（Robert Lansing）国務長官が徹底的に親中であった宣教師、国務省極東部長のエドワード・T・ウィリアムズ（Edward T. Williams）からそれぞれ影響を受け、それがアメリカの東アジア政策に反映されたことは知られている。Paul A. Varg, *Missionaries, Chinese, and Diplomats: The American Protestant Missionary Movement in China, 1890-1952* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1958), 79; James Reed, *The Missionary Mind and American East Asia Policy, 1911-1915* (Cambridge, Massachusetts: Council on East Asian Studies, Harvard University, 1983), 8, 163, 168-169; Warren I. Cohen, *America's Response to China: A History of Sino-American Relations*, 4th ed., (New York: Columbia University Press, 2000), 76.

(82) 門外漢「東京たより」『国民新聞』大正三年五月九日。大戦勃発前の大正三年三月、『国民新聞』は「米支提携」

を報じて以下のように警鐘を鳴らしている。「米国の支那に対する政策は近頃急速に発展し、其企画は著々奏功せり。之と同時に袁世凱の米国の勢力を利用せんとするの政策も急転直下、此頃に至り意外なる成功をなせり。而して最も信すべき筋の報道に曰く、去月末に於て秘密裡に米支兩國間に経済的及政治的の提携成れりと。其結果將に極東の形勢に一大変化を来たさんとす。」「米支提携成れり／支那は米国の金力に依頼し／米国は支那の位地を利用し／極東の形勢大に變ぜんとす」『国民新聞』大正三年三月三十日、読み易さをはかるため、文中に句読点を補った。

(83) 門外漢「東京たより」『国民新聞』大正四年四月二十七日、大正三年三月三十一日、四月十八日、八月十二日。

(84) 門外漢「東京たより」『国民新聞』大正四年六月二十九日、五月六日。

(85) 門外漢「東京たより」『国民新聞』大正三年九月二日、大正四年五月十五日。

(86) ルートは下関↓釜山↓京城↓滿洲(奉天、ハルビン、長春、吉林、長春、大連、旅順、營口)↓華北(山海關、秦皇島、北京、南口、青龍橋、張家口、大同、北京)↓華東(漢口、九江、南昌、廬山、南京、揚州、上海、杭州、蘇州、曲阜、泰山、濟南、青島)↓下関というものであった。このときの旅行記は『国民新聞』に連載され、帰国後、同紙に追加掲載された「遊支偶録」と合わせて、のちに徳富猪一郎『支那漫遊記』民友社、大正七年六月として公刊された。なお同書の復刻版として、小島晋治監修『大正中国見聞録集成』第六卷、ゆまに書房、一九九九年がある。

(87) 徳富『支那漫遊記』。

(88) 同右、二〇六頁。

(89) 同右、二〇、一〇一、一二二頁。

(90) 同右、一二一頁。北京のいわゆる坂西公館が情報の前線基地であった点については、戸部良一『日本陸軍と中国「支那通」にみる夢と蹉跎』講談社、一九九九年、五〇―六三頁。

(91) 徳富『支那漫遊記』二六一、二八二―二八三頁。

(92) 同右、二五〇―二五一頁。

(93) しかし実際には、彼の心は切実であり、この意見はありきたりの文句と片づけることはできない。旅行中、蘇峰の会った少なからぬ人々が日本への留学経験者であり、その中には蘇峰の読者も存在した。例えば、梁啓超は発売されたばかりの『杜甫と弥耳敦』を賞賛し、蘇峰の文で通覧しないものはないと述べ、曹汝霖は早稲田大学在学中、

『国民叢書』の愛読者であったとし、湯化龍は日本語の読解ならば差し支えなく、『世界の変局』『時務一家言』を購読し、『杜甫と弥耳敦』は注文中であると語ったという。また梁啓超の午餐会で蘇峰が言葉を変えたある官僚は「我々の間では、あなたは日本の梁啓超で、梁啓超はシナの徳富蘇峰だといわれているが、あなたの意見を聞かせてほしい」と尋ねた（同右、一一五、一一九、一二七頁）。しかしながらそうした世代の後になると留学生の多くがアメリカに向かうようになり、これも彼の不安の種となっていた（同右、三八四―三八五頁）。また日本人が中国で欧米人と商戦、外交戦、社交戦、勢力戦を行う上で、中国語は最上の利器になると蘇峰は考えていた（同右、二五一頁）。

(94) 早川『徳富蘇峰』三二五―三二六頁。

(95) 蘇峰生「遊支偶録」『国民新聞』大正七年二月六日、三月九日、四月二十三日、徳富『支那漫遊記』四一五―四二〇、四七一―四七二、五〇〇―五〇一、五五二―五五五頁。なお蘇峰の日中提携論の意図については、藪田「徳富蘇峰の中国認識」が別の角度から考察しており、あわせて参照のこと。

(96) なお蘇峰は、中国漫遊の前から日本が「極東平和の番人」になること、日中新聞記者が提携することを希望しており、以上の日支同盟論提唱は帰国後に突然スタートしたわけではない。門外漢「東京たより」『国民新聞』大正四年五月十五日。またそれ以外にも彼は、日本側の問題点を指摘している。例えば、シナに対して日本人は自己本位に過ぎるところはないか、利己主義の本家である彼らに対して、その利己主義を無視し、わが利己主義のみを主張するのでは、彼らから憎まれても仕方がないと述べ、日本側の内省を促した（徳富『支那漫遊記』三九七―三九八頁）。また日本に来ている留学生が冷遇されて帰国してから反目的になることが少なくない点を指摘し、そうした中には彼らの日本人に対する邪推もあるが、シナ人にもう少し「温かなる心腸」を示すことが必要である、こうしたことが自他の利益が衝突した際、幾許かの緩和力になり得る、と説いている（蘇峰生「遊支偶録」『国民新聞』大正七年一月三十一日）。

(97) 徳富『支那漫遊記』三九三―三九四、四二〇頁。

(98) 同右、四〇二―四〇三頁。

(99) 同右、三三五―三三九頁。なお、海外からの支援にもとづく中国のキリスト教系大学の歴史については、Jessie

Gregory Lutz, *China and the Christian Colleges 1850-1950* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1971) を参照のこと。

(100) 徳富『支那漫遊記』八九頁。

(101) 同右、四三三頁。

(102) 同右、五二四―五二五頁。

(103) 門外漢「東京たより」『国民新聞』大正四年十二月二十三日。なお杉原「徳富蘇峰―『支那』観にみる『発想の根源』」、藪田「徳富蘇峰の見た清末中国」は、蘇峰が中国を歴史、文化、人口とその勢力などの点からプラスに評価していたという別の面についても、マイナス評価とあわせて言及している。

(104) 蘇峰生「大正の青年と帝国の前途(百三十二)」『国民新聞』大正五年八月三十日。なお蘇峰が「米魂」に着目し、大正の青年が日本魂を養う上でこの米魂に学ぶ必要があると考えていた点は、梅津「徳富蘇峰と帝国日本の魂」一五二―一五三頁も指摘しており、本稿はこれについてさらに詳細に検証を試みるものである。

(105) お茶の水図書館成篋堂文庫所蔵の蘇峰旧蔵書、Henry van Dyke, *The Spirit of America* (New York: The Macmillan Company, 1910) の表紙見返しには「明治四十三年五月十日米国紐育府青木新氏贈 蘇峰字人」と筆書きされており、一四七頁には「43.5.13 桂首相私邸応接間ニ於て I. T. (徳富猪一郎のイニシャル)」と黒鉛筆で記され、二七六頁には「大正五 五月十九日 於再読」と黒鉛筆で書かれている。その他にも青、赤の鉛筆も用いられ、多くの書き入れとラインが残されている。なお表紙見返しに貼られた新聞切抜 (Florence Finch Kelly, "Americanizing Carl Shurz," *Japan Advertiser*, 1 March 1930) には、青鉛筆で「[1930.3.1 J. A.] より、」から本文中の青鉛筆による書き込みも昭和五年になされたものではないかということが推察される。また裏表紙見返しにも雑誌切抜 ("The Origin and Inception," *The Nation*, 17 March 1917, 795-797) と新聞切抜 (紙名、発行年月日不明) 二点が挿入されており、こうしたことから蘇峰が明治四十三年、大正五年に目を通した後、折に触れて同書を書棚から取り出し、そこにアメリカ情報を付け足して重要参考文献としていたことがわかる。

(106) van Dyke, *The Spirit of America*, 39-40.

(107) Ibid. アンダーラインは黒鉛筆による。原文には右余白に同じく黒鉛筆でサイドラインも記されている。

- (108) Ibid., 42. 黒鉛筆によるアンダーライン。なお同書六二―六三頁に「自恃の精神」と黒鉛筆で書かれた約四センチ×七センチ程度の大きな付箋が入っている。蘇峰が自己信頼、自恃の精神を重視していたことがうかがえる。
- (109) 原文は “We will walk on our own feet; we will work with our own hands; we will speak our own minds.” 日本語訳は酒本雅之訳『エマソン論文集』上、岩波書店（岩波文庫）、一九九〇年第一〇刷、一四九頁による。
- (110) 同右一三六―一三七頁。
- (111) van Dyke, *The Spirit of America*, 71-72. 黒鉛筆によるアンダーライン。
- (112) Ibid., 120. 黒鉛筆による二重サイドライン。
- (113) Ibid., 141. 黒鉛筆によるアンダーライン。
- (114) カネギーについては、Ibid., 129. 蘇峰はアンドルー・カネギーの名前に黒鉛筆によるアンダーラインを引いて着目している。エジソンについては、Ibid., 131-132. そこには次のようにある（傍線は黒鉛筆によるアンダーライン。とくに最後の段落は黒鉛筆による右サイドラインがある。）

アメリカの発明家は必ず、あるいは真つ先に金銭を目当てとするわけではない。彼は別種のゲームを追い求めているのであり、そちらにずっと深い興味を抱いている。そのゲームとは自然への勝利、時間や空間の征服、野生力の鍛練、新しいものの発見といった事柄である。彼が金銭を好むのは勿論のことだ。人間の大半はそうしたものだ。しかし彼が最も愛するのは、ある執拗さを持ち長期にわたって人間のゲームに勝利を収めることである。

エジソンはこの点で典型的なアメリカ人だ。彼は確かに金を稼いできた。しかし他人が彼の発明から作り出した金額はそれとは比較にならない。たとえある実験で稼いでも、別の実験で新たな冒険のリスクを冒し、それを使っ
てしまおうとする。……

新しい発明、労力節約の装置、進歩した機械がアメリカほど難なく歓迎され、直ちに取り上げられる国はない。農夫は最新の鋤、最高の刈取り機、草刈り機を求め、その妻は最新型のミシン、娘はピアノラ〔自動ピアノの一種〕、息子は小型オープンカーかオートバイを持たなければならない。

- (115) Ibid., 134-135. 右余白に黒鉛筆による二重のサイドライン。
- (116) Ibid., 161. 青鉛筆によるアンダーライン。先に註で述べたように、この青鉛筆による書き込みは昭和五年になされた可能性が高い。しかしながら同じページに黒鉛筆で「個人主義」と書かれた付箋が入っていることも見逃せない。これは同書六二―六三頁に挿入されている「自恃の精神」の付箋とほぼ同じ大きさである。この黒鉛筆によって記された文字は明治四十三年ないし大正五年に記されたものではないかと考えられ、すでにその時期から蘇峰がアメリカ人の個人主義とそこに見られる自己組織性、自発性に着目していたことがうかがえる。
- (117) Ibid., 167-168. 青鉛筆によるアンダーライン。一六八―一六九頁に黒鉛筆で「自己組織」と書かれた付箋が入っている。これも先に見た「個人主義」「自恃の精神」の付箋とほぼ同じ大きさである。
- (118) またこうした各論だけでなく、同書を通じて一貫するヴァン・ダイクの基本姿勢、すなわち国家を観察する際にはその国の根底に流れる魂を洞察しなければならないという態度自体が、もともと国家、民族のスピリットを重視する蘇峰の考え方と重なり合う部分があった。ヴァン・ダイクは「精神によってのみ、国家は偉大かつ自由となる」(Ibid., 192) との文句を引いているが、大和魂、日本精神、皇室中心主義に立脚しつつ日本帝国のさらなる名誉と発展を望む蘇峰はそうした一節にも共鳴し、黒鉛筆でアンダーラインを記している。
- (119) 蘇峰生「大正の青年と帝国の前途(百二十六) 米国魂とは何ぞ」『国民新聞』大正五年八月二十三日。
- (120) ミュンステルベルクはドイツ出身の心理学者で、明治二十五年(一八九二)、ウィリアム・ジェームズ(William James)の招請によりハーヴァード大学を訪れ、同三十年からハーヴァードで心理学を教え続けた。長期間アメリカで暮らしたヨーロッパ人、アメリカの良き理解者として、『アメリカ国民』(The Americans, 1904)、『アメリカ問題』(American Problems, 1910)、『アメリカ人の愛国心』(American Patriotism, 1913)、『戦争とアメリカ』(The War and America, 1914)、『平和とアメリカ』(The Peace and America, 1915)とったアメリカ論を発表している。本間長世「アメリカについてのヨーロッパ人のイメージ」ならびに解説者・訳者「あとがき」、岩永健吉郎、松本礼二、宇田佳正、岩野一郎、海老根宏訳、本間長世解説『アメリカ古典文庫 21 ヨーロッパ人のアメリカ論』研究社出版、一九七六年所収、二二―一四、三〇四頁。同書にはミュンステルベルクの英語による最初の著作『アメリカの特質』(American Traits: From the Point of View of a German, 1901)の第一章(海老根宏訳)が収録

されている。以上のうち蘇峰が所有していたのは『アメリカ国民』である。お茶の水図書館成篁堂文庫所蔵の蘇峰旧蔵書 Hugo Münsterberg, *The Americans*, trans. E. B. Holt (New York: McClure, Phillips, 1904) をひょうへん、確かに蘇峰のいう「自ら指導する精神」について説明されていることがわかる。ただし同書に書き込みの跡は見られず、彼がどこまでこれを咀嚼していたかは明らかでない。

(121) 蘇峰生「国民試煉の時」『国民新聞』大正三年四月十二日。「大和民族の自信力」『国民新聞』大正四年一月一日（社説と考えられ、署名なしだが、文体、内容からいつて蘇峰の執筆と推察される）。

(122) 徳富猪一郎『大正の青年と帝国の前途』民友社、大正五年十一月で繰り返しうった不安を述べている。同書は『国民新聞』に連載された同一名の評論をまとめたものである。

(123) 蘇峰生「大正の青年と帝国の前途（百五十八）」『国民新聞』大正五年十月一日。

(124) 酒本訳『エマソン論文集』上、二二七頁。お茶の水図書館成篁堂文庫所蔵の蘇峰旧蔵書、Ralph Waldo Emerson, *Essays* (London: Macmillan and Co., 1885), 63 の該当箇所には、青鉛筆でアンダーラインが引かれており、右余白に黒インクで「妙々」と書き込まれている。青鉛筆アンダーラインは明治期に、黒インクは大正十四年四月頃に記されたもので、蘇峰がくり返し共鳴した一節であることがわかる。

(125) お茶の水図書館成篁堂文庫所蔵の蘇峰旧蔵書、Walt Whitman, *The Rolling Earth: Outdoor Scenes and Thoughts From the Writings of Walt Whitman* (Boston and New York: Houghton Mifflin Co., 1912) における蘇峰の書き込みを参照した。「大道の歌」は同書六一―八四頁に収録されている。蘇峰は第四章がある六五頁左余白に黒鉛筆で「大正二年四月十五日 汽車茅崎ヲ過クル時」と記している。全十五章のうち四章までを東海道線の車中、神奈川県の茅ヶ崎駅を過ぎるあたりで読み終え、第五章以下はその後に読了したことがわかる。なお日本と西洋におけるホイットマンの受容に関する比較文学、比較文化の優れた研究として浩瀚な亀井俊介『近代文学におけるホイットマンの運命』研究社出版、一九七〇年がある。同書は、蘇峰訳「大道の歌」が岩野泡鳴によって『大道担々長安に通ず』的な漢文句調だ」と批判されたことを指摘し（四〇六―四〇七頁）、また徳富監修、伊達源一郎編集『近代文学』に見られるホイットマンに関する記述を紹介しているが（四六八頁）、蘇峰のホイットマン受容については具体的に述べていない。

(126) Whitman, *The Rolling Earth*, 61. 邦訳は、杉木喬、鍋島能弘、酒本雅之訳『草の葉』上、岩波書店 (岩波文庫)、一九八八年第一六刷、三四三頁から引用した。

(127) 蘇峰生「大正の青年と帝国の前途 (百五十八)」『国民新聞』大正五年十月一日。

(128) 同右。

(129) 「大道の歌」第四章第四節、*The Rolling Earth*, 65-66. 黒鉛筆によるアンダーライン。杉木他訳『草の葉』上、三四八頁。

(130) 「大道の歌」第六章第一—三節、*Ibid.*, 67-68. 黒鉛筆によるアンダーライン。杉木他訳『草の葉』上、三五〇頁。さらに左記の個所も蘇峰を引きつけている。ここに書き込みは再現できなかったが、彼旧蔵の原書では二段目の「大地は決して飽きさせない」以下の右余白に黒鉛筆でサイドラインが記されている。「大道の歌」第九章第一—二節、*Ibid.*, 72. 杉木他訳『草の葉』上、三五五頁。

出かけよう、君がたとい誰であろうとほくといっしよに旅に出よう、
ほくといっしよに旅をすれば決して飽きさせないものが見つかるはずだ。

大地は決して飽きさせない、

大地も最初は粗暴で、無口で、不可解だし、「自然」も最初は粗暴で不可解だが、
挫けてはならぬ、逃げ出してはならぬ、内部には素晴らしいものが幾つもしつかりと包みこまれている、
誓ってもいい言葉では語れぬほどに美しく素晴らしいものが確かにある。

(131) その一方で、蘇峰がホイットマンによるまた別のタイプの詩にも関心を示していることは興味深い。それは「学識ある天文学者の言葉を聞いたとき」(“When I Heard the Learn'd Astronomer”)と題する歌で、次のようなものである。なおここに書き込みは再現できなかったが、蘇峰旧蔵の原書には左余白に黒鉛筆でサイドラインが記されている。*The Rolling Earth*, 110. 邦訳は鍋島能弘、酒本雅之訳『草の葉』中、岩波書店 (岩波文庫)、一九八八年第一二刷、二一八頁から引用した。

学識ある天文学者の言葉を聞いたとき、

証明や数字が列をなして目のまえに並べられたとき、

あまたの図表や図形が目のまえで、割ったり、加えたり、測定したりされたとき、

講義室で喝采を浴びつつ天文学者が講義をするのをじっと坐って聞いたとき、

何とまあ早^{はや}早となぜかわたしは疲れを感じ吐気をもよおし、

ついには席を立ち人知れず外に出て、神秘的な夜のしめった大気のかを、

ひとりであてもなくさまよい、そして時折、

深い沈黙の底から星を見上げた。

天文学者が計算式や図形を次から次へと持ち出しながら天体を講義している。その説明を聞いてみると、退屈なところか気分まで悪くなってしまう。教室の外に出て、神秘的な夜の湿った空気を肌にしながらさまよい歩き、深い静寂の中から夜空にまたたく星を仰ぎ見たというのである。あまりにも理性的で無味乾燥な室内に嫌気がさして戸外に出ると、そこには神の創り出した神秘と情緒の世界があった。いわゆる「学識ある」人間にこういう奥深い情趣は理解できないかもしれないが、星、天体、自然とは本来、そうしたものではないかというのであろう。先の「大道の歌」は、自然の中に積極的に進み入り、何かを見つけ、創り出そうという積極的、能動的なものであったが、この「学識ある天文学者の言葉を聞いたとき」は合理主義者の世界から逃げ出すと、そこには人智では計り知れない自然世界があったという受動的なトーンで描かれている。同じく自然を扱いながらも、その態度は対照的である。前者が意志的であるのに対して、後者はより情緒的で詩情が豊かである。このような詩にラインを引いて注目したということとは、蘇峰もまたそうした風趣を感知できる人物であったということである。

以上のように蘇峰はホイットマンから、一方でアメリカ的な進取の気性を、他方では神秘的で詩的な世界を感じ取った。どちらも蘇峰自身がその内面に秘めていたものであり、それがホイットマンの詩に接して共振、共鳴したのであろう。換言すれば、蘇峰はホイットマンと意志と情緒の双方に共有点を持ち合わせていたということである。

- (132) 蘇峰生「大正の青年と帝国の前途(百二十五)」『国民新聞』大正五年八月二十二日。
- (133) 活潑潑地とは魚がはねるように勢いがよいこと、極めて活発なことを意味する。諸橋轍次『大漢和辞典』巻六、大修館書店、平成十一年修訂第二版第五刷、一一二頁。
- (134) 蘇峰生「観瀾亭雜俎(十九)」『国民新聞』大正六年八月四日。
- (135) 蘇峰生「大正の青年と帝国の前途(百二十七)」『国民新聞』大正五年八月二十四日。
- (136) 拙著『近代日本人のアメリカ観』二〇六―二〇七頁。
- (137) 同右、二一五頁、蘇峰 徳富猪一郎「大詔奉戴の過去、現在、未来」二、『東京日日新聞』昭和十七年十二月九日。
- (138) 拙稿「敗戦後の徳富蘇峰とアメリカ」六七―六八頁。
- (139) その他に当時の蘇峰は数名のアメリカ人に対しても高い評価を下しており、その代表例として、ドワイト・W・ラーネッド(Dwight Whitney Learned)、チャールズ・E・ノートン(Charles Eliot Norton)がいる。ラーネッドについては「予の同志社にある、政治、経済、歴史等の緒論、一として「ラーネッド」翁に聴かざるものなし。……翁に負ふ多大也。……真に同志社に取りては、国宝也」(蘇峰生「同志社の四十年記念祝会」『国民新聞』大正四年十一月十六日)としている。ノートンについては、彼から謹呈された書物を見てみると、この「老紳士の清臈、温雅なる面目」を今なお髣髴としてそこに見る(青山仙客「蘇峰」『曝書漫筆』『国民新聞』大正五年九月八日)としている。また『国民新聞』は、ニューヨークにおけるメソヂスト教会総会のため韓国から東京経由で帰米することになったメリマン・C・ハリス(Merriman Colbert Harris)監督送別会の開催予定(大正五年三月二十三日、於丸ノ内の保険協会)を報じているが、同席上、石井菊次郎外相、金子堅太郎の他に蘇峰もスピーチが予定されている。「任満て帰国するハリス博士／熱心な日本の同情者／盛大なる送別会開催」『国民新聞』大正五年三月二十四日。以上三名のアメリカ人は、時代を問わず蘇峰が敬愛しつづけた人物であった。
- (140) 排日移民法に対する蘇峰の反応を考察した論考として、三輪公忠「戦争はそのとき始まっていた」『中央公論 歴史と人物』昭和四十七年九月号、同「徳富蘇峰の歴史像と日米戦争の原理的開始―大正十三年七月一日、排日移民法の実施をめぐる―」芳賀徹、平川祐弘、亀井俊介、小堀桂一郎編『講座比較文学 第5巻 西洋の衝撃と日本』東京大学出版会、一九七三年所収(のち三輪『隠されたベリーの「白旗」―日米関係のイメージ論的・精神的的研究』上

智大学、一九九九年に収録）、有山『徳富蘇峰と国民新聞』の第八章「大正末期における対外論」などがある。